

# 百人一首と佐佐木信綱・愛国百人一首前後

伊 藤 嘉 夫

## 異種百人一首

小倉百人一首が広く世に行われるようになったのは室町時代になってからであった。百首歌が重之や相模によって創められてから、たちまち世に流行するところとなり漸くに盛んになり、近世に至るまで百首歌を詠む歌人が多かったように、百人一首というのが、一つのまとまりとして格好であるために、小倉百人一首に模擬した、百人一首があらわれるようになった。室町時代の撰定で、世に知られているのは、足利五代將軍常徳院義尚の撰の、「新百人一首」、後晋光院撰政二条良基の「後撰百人一首」と撰者未詳の「武家百人一首」の三種があり、(武家百人一首については、跡見学園短期大学紀要六集拙稿参照)、江戸時代になっては、漸く庶民の中に流布して、後期には、緑亭川柳(俳風狂句百人一首・英雄百人一首・列女百人一首・続英雄百人一首・義烈百人一首・奇特百人一首、畸人百人一首・贈答百人一首・俳人百家撰)賞月堂主人(武家百人一首・和漢百人一首)のよ

うに百人一首専門作者とでも言うべき人もあらわれて、異種百人一首は、百種にも上ろうとした。中には百人の人を撰び、これに讃歌を記したり、百人の歴史上人物をあげて、史詠の歌を集録したり、小倉百人一首をもじって詠んだ一人の歌で、異型の百首歌であったりすることがある。或は、外題を代えて内容の同一のもの、

外題は同じで内容のちがうもの概ね同じで少しくちがうものなど雑多であって、外題の標記だけでは甚だおぼつかないで、異種百人一首の全歌を出して、とりあえず「百種百人一首」をまとめることとした。さいわい跡見学園には小倉百人一首及び異種の百人一首が多く架蔵されているので、一方に目録を、一方では本文全貌をあらわす叢刊をくわだてた。順序等は、別に定めず、片はしから活字にして行く考えである。めづらしい異種百人一首があったら御教示戴きたいと切に御願する。

本稿では、江戸期に行われたようにには流行を見なかったが、生涯百人一首に関心をよせ、自ら数種の百人一首の撰も行った、佐佐木信綱の撰になる百人一首六種と、信綱の提唱で、日

本文学報国会の撰にかかる愛国百人一首を中心に、世にあらわれた百人一首を国民精神の流動のすがとして把え、その前後の四種の百人一首を活字にし、若干の解説を行うことにした。

## 佐佐木信綱と百人一首

佐佐木信綱が父弘綱と共編で刊行した日本歌学全書十二冊が明治卅二年から卅四年にわたって刊行されたのは、易くは手に入り難かったりする古典和歌の叢刊で復古の機運に乗ったものではあったが、云わば千天の慈雨のごとく読書界をうるおした。古典研究者が跡を断とうとするを憂えて、東京大学には古典科が出来、それは古典学者の種を残す為であったと云われた。日本歌学全書は、あまねく歌人、学者のテキストとして流布した。万葉研究などこれによらない者は無かつたであろう。森鷗外が戦地に携えて行き、前進陣地で写した写真には歌学全書の万葉が机上にあった程であった。学界、歌壇に貢献する処は多かつた。明治二十五年には、浩瀚な、和歌百科辞典ともいふべき「歌の栞」を出版した。若冠十九歳の著述とは思えない大著

であった。これは、永く新旧歌人の必携の書となつて、明治末期まで版を重ねた。十八歳にして父を喪つた信綱は、官途につくことなく、生涯民間の学者、歌人として終始したが、すでに著述、研究、実作、指導を以て、世にやがて刊行すべき続日本歌学全書の成稿に日夜いそしみながら、国文学の校註九種を明治二十五年には上梓し、廿六年正月には「標註七種百人一首」を出版した。これは小倉百人一首と、異種百人一首六種に校訂頭註を加えたもので、異種百人一首は、「新百人一首」(義尚)「後撰百人一首」(良基)「続百人一首」(弘綱)「源氏百人一首」(翁満)「近世百人一首」(信綱)「修身百人一首」(信綱)である。後年に至るまで、信綱の選歌に対する自信と確信は大きなものであったが、二十歳の信綱にはすでに動ぎない自信のあったことがわかる。選歌は歌に対する評価の結論を具体的に示すもので、文章によって自分の意見をささえることも出来ぬ、弁解のない解答である。信綱はすでに若き学者、歌人として重んじられていたのである。

嵯峨の中院の障子の色紙形に京極黄門の筆をそめられし百人一首はしも、世にあまねく行はれて、草刈る童汐くむ少女も其歌をそらにかへぬ者なきに至りぬ。さるを後の世にかの百首にもれたる人、はたその後歌どもを撰びつどへしたぐひかつかつ見ゆるを、それらはいづれも世にうづもれつ

つ、其名をだに知る人いとまれなるはいともいともあかぬかぎといふべし。ここに佐々木ぬしさるたぐひを集め、標註をくはへて物せられし此の書を見るに、おのがあかづくちをしと思ひるし心になかひて、いともいともよろこばしうおぼゆるあまりに、巻の初に一言といふをいなびもやらで、いささかかいつくるは、東久世通禧。この序文をみても、信綱はいまだ二十歳の若冠ながら、一かどの学者としてあつかわれていたのがうかがえるのである。

続いて本文は緒言にはじまる。緒言は十四頁にわたつての解説がかかげられている。このうち、「続百人一首」は弘綱が、歌道と書道のために弟子に撰じたもの、「近世百人一首」と「修養百人一首」は信綱の撰であると断つた。この頃信綱は、続日本歌学全書の編集に従つたので、「近世百人一首」を撰んだのはゆかりがある。後年に、信綱が選歌にあつたての自負と確信は、すでにこの頃に芽をさざしているのがわかる。翌年正月には「小倉百人一首講義」を出版した。信綱の評釈書の最初のものである。その青年期に百人一首に関心があつただけでなく、「百」という数については、「新謡曲百番」(明四五)「和歌百話」(大七・)「万葉二百種簡明目録」(大一一)「百代草」(大一一)「五百重波」(大一一)「万葉集百話」(昭一一)「行旅百首」(昭一六)「評釈万葉集百首選」(昭一九)などの著書には、百又は、二百五百等が用いら

れている。その他大磯百首、鎌倉百首など何種かの百首歌もある。「明治文学の片影」(昭九)は、物故の人で、交遊のあつた明治文学者又は、明治文学に関連のあつた人、百人について語られ、この百人は偶然そつたのでなく、さしかえなどして、丁度百人にしたので、この書については、私が電通ビルにあつたスタジオに、書翰の写真を撮りに行つたりした事情などで直接見聞したことである。

信綱の選歌の百人一首は、前述の「近世百人一首」「修養百人一首」の外「新撰婦人百人一首」「竹柏園百人一首」「西山百人一首」「万葉集百首撰」「新撰百人一首」と七種におよんでいる。このうち万葉集百首選については、信綱から、私はかつて斯ういう話を聞いた。それは、或時万葉秀歌に対してであつたかもしれないが、斎藤茂吉に、信綱がああ選はあまりよくないですねといったところ、茂吉はむつとしたように、先生御選びになつてみせて下さいと云つたとか。信綱は、万葉を選ぼうとしては、いつも気に入っていた。ある時私に、すぐに選んでみてよかつたが、あまりあて付けみたいなのでひかえていたが、もういいでしょうねと、云つたことがある。そして選ばれたのが、「評釈万葉百首選」なのである。

ここには信綱撰にかかる異種百人一首につき次の六種の全歌をかかげることにする。

一、歌は二行に書き、その下に人名を出す。(原本が人名を前に出した場合もこれをこ

とわらない)

一、詞書あるものは概ねこれを省く。但し省略した詞書は、解説中に書く。

一、解説の便を考えて仮名に漢字をあてたり、おくり仮名を加えたりすることがある。一々ことわらない。

一、緒言、後記などあるものは解説の中に全文又は省略して載せる。

1 近世百人一首 明治二六年一月撰

2 修身百人一首 明治二六年一月撰

3 新撰婦人百人一首 大正五年一月撰

4 竹柏園百人一首 大正六年一月撰

5 西山百人一首 昭和二九年頃撰

6 新撰百人一首 昭和三四年五月撰

1 2は七種百人一首所収、3は某婦人雑誌切抜帖(東洋大学蔵) 4「心の花」附録 5孔版。

6 註釈書もある。昭和三六年一月成婚の皇太子及同妃に献上したもの。

### 愛国百人一首前後

佐佐木信綱は、はやくは全国の歌人からその歌を募集して、千代田歌集を父と共に撰し、自らも明治歌集三冊を撰したのは、江戸期の鯉玉集、鴨川集にも続くもので、短歌作者をひろく全国的に結集する場をつくり、これがやがて雑誌を中心とする短歌結社の種子となったのであった。自ら進んで短歌の隆盛に指向した信綱の父より享ける精神であった。信綱が撰集に関する熱情は、勅撰集撰定のことを三条公に建白し

たのは若冠の日であった。斯道振興への悲願指向であった。百人一首に関心を持ったのも、短歌の弘布には、これによることの効果を知って居た為でもあったろう。小倉百人一首が、町家の子女にもてあそばされるように、短歌に未知の者も、百人一首ならば手にとることもあろうと考えたのであろう。撰集のことは、根強い意願であつてついに改造社長山本氏を動かして、自らを加えた歌壇最高の人々の撰で、昭和十年にはじまる新万葉集十二冊となつて結実した。これは信綱の斯道を思う熱情なくては出来なかつた事である。この事については他日詳しく書くことと思う。世は五一五事件、二二六事件などを口火に、満州事変から支那事変、太平洋戦争と、落石の山腹を落ちていくように戦争渦中に国全体がまき込まれてしまったのであった。

昭和十一年末に東京日日新聞社が、歌壇入百人に自選の歌を依頼して「昭和百人一首」を発表した。これを見ると、歌人たちの歌の上には、ほとんど時代の風潮は見ることが出来ない。同じ年に、同じ新聞社が、文壇入百人から一首づつを求めて「文壇百人一首」を発表しているが、これにもその影はほとんど見えない。

昭和七年に五一五事件がおこり、九年にはプロレタリア作家同盟が解散し、十年には美濃部達吉氏の天皇機関説が排撃され、十一年には二・二六事件がおこっている。然るに文壇人も歌壇人も、ふれてはならぬもののように静かに省みて他を云っている。

それが十五年になると雑誌キング(当時発行部数日本一の大衆雑誌)の依頼により川田順が撰んだ「愛国百人一首」になると、全く百八十年の転身を示している。昭和百人一首では、

### 二株の梅

と詠んでいる川田順には、時局をよそに見た静閑さであった。それがこの百人一首の緒言で、「現下の国情において歌人も街頭に立たねばならぬ」と云い「現下の国民精神にいささかでも寄与せねばならぬ」と、愛国の歌を撰んでいる。人皆の心がもり上つた。十六年十二月八日宣戦の詔勅が下り、国民総動員の声がかかり、日本文学報国会が結成され、佐佐木信綱はその短歌部会の会長となつた。信綱は戦中の国民精神作興と健全娯楽の対象として、小倉百人一首かるたに代る「愛国百人一首」撰定を提案し、日本文学報国会は事業として取り上げ、佐佐木信綱、斎藤茂吉、太田水穂、尾上柴舟、窪田空穂、折口信夫、吉植庄亮、川田順、斎藤瀧、土屋文明、松村英一の十五氏を撰者、顧問に内閣情報局、大政翼賛会、文部省、陸海軍省、放送協会等の部局長と、徳富蘇峯、下村海南、辻善之助、平泉澄、久松潜一、井野辺茂雄、という大がかりのものであった。歌は毎日新聞社が全国から募つた明治維新前に没した人の愛国歌と、短歌部会の幹事の呈出した歌、撰定委員の推薦した歌を、前後七回にわたつて慎重審議の上決定したものであった。私も当時短歌部会の

幹事として、呈出歌の撰定にあたった。私は、谷鼎、都築省吾氏と三人で近世を受け持った。撰定の会議には幹事である我々も陪席した。

翼賛会第五部第三課長であった井上司郎（逗子八郎）は、時代の脚光をあび人を人と思わぬ言動もあつた。実朝の「君に二心わがあらめやも」の「二心」は言葉にかけるだけでもよくないので他の歌と代えてはというのである。その時平泉澄氏は「時流に乗って何をいう。学者の信念は時代に流されるものでない。」としづかに熱情を披歴して学者の信念の時流や權威によつて奪われるものではないことを云われたのに感動したりした。今一つ、忘れ難いのは信綱に云つた逄空の言葉であつた。信綱は思い込んだことは、ねばりこく熱心であつた。撰定の席上、鏡月坊の歌と言道の歌を推した時、鏡月坊の歌を特にくりかえして熱心に推した。

勅なれば身をば寄せてきものふの八十氏川

の瀬にはたたねど 鏡月坊

その時逄空は云つた。「くどいですね。」一同ははつとした。「佐佐木さん、あなたがいくらよい歌だと云つたとて、だめです。この歌はげすです。げすな歌です。」口ぎたない言葉に座は白けた。信綱は一言もいわなかった。結局鏡月坊の歌は愛国百人一首には入らなかつた。会はてて、文明に逢うと、「先進に対しての物の言い様もあるというものですなあ、無礼というものです。」と私を慰めるように云つてくれた。私は、かつて横山重氏の言つたことを思いだし

ていた。赤彦にきまつていた慶応の教授の席が、赤彦死去によつて空き、そこへ折口氏を推薦したのは横山重氏だったが、どうしたことか折口氏は、かげで横山氏の身に覚えのないことについて讒謗の限りをつくすので、ついにつかまえて面罵したら、折口氏は「私は恥を知りません」とけろつとしていたにはあきれたといひ、おこつた横山氏は経営する大岡山書店が出版して「古代研究」の二冊をぞつき本に渡してしまつたという話を思い出していた。――

信綱逄空の確執は、昭和九年英訳万葉集の編纂のことからはじまる。英訳万葉の事業は学術振興会によつて行われたが、その委員の人選についてであつた。委員は八人。滝精一、姉崎正治、新村出、阿部次郎、辻善之助、鈴木虎雄、市川三喜と佐佐木信綱。各千首を撰び、これを合せて更に合議して千首とし、その千首にまづ口訳をする、その委員には、橋本進吉、吉沢義則、山田孝雄、武田祐吉、斎藤茂吉と佐佐木信綱の六人。この委員の中に逄空は入りたかつた。会にはかられたが逄空の自説を固執してゆづらない癖が会の運営のためにいかかという人があつて、ついに入れなかつた。信綱のせいではない。これを根に持つてか、これからというものには逄空はことごとくに信綱にあからさまな反感を示した。逄空最初の著「口訳万葉集」には「おもふせながら竹柏園先生にたてまつる。折口生」とねんごろに先進への礼をとつて献じ、昭和七年信綱還暦祝賀の宴に参じて詞を捧げた

が、十一年頃、日本歌人会の会長に信綱を推そうとする会場で、たまたま信綱が居なかつたのに、「信綱は短歌革新に何の寄与もしなかつた、かいなでの歌によみすぎない」など会長推挙の阻止につとめたかと思うと、信綱の前では「世界文芸大辞典の信綱の項は私が書いた。短歌革新のいさおしは顕著です」などというのが嫌だつた。

愛国百人一首に関する書には、

定本愛国百人一首解説 日本文学報国会

愛国百人一首評釈（朝日新聞）川田 順

愛国百人一首評釈（開發社刊）窪田空穂

愛国百人一首物語（天佑書房）村松英一

同 絵と解（台北大木書房刊）梅田 章

同 早わかり 国民精神普及会編刊

又、習字用の手本に、帖又は冊子で、

同 帖（峯文社刊） 神部晚秋

同 手本（駸々堂刊） 源元公子

同 帖（泰東書道院刊） 平尾花笠

同 帖（萩原星文堂） 大沢竹胎

その他、歌留多も出版された。戦は熾烈となつて、歌留多どころではなかつた。

愛国百人一首と前後して出版された皇国百人一首も、同じ流れの一環であつた。前と同様式で次の四種の百人一首の全歌を叢刊する。

7 昭和百人一首 昭11・12東京日日新聞社撰

8 愛国百人一首 昭15・11 川田順撰

9 愛国百人一首 昭17・11 日本文学報国会

10 皇国百人一首 昭17・8 金子薫園撰

近世百人一首

佐々木信綱撰  
明治三一年刊

- 1 さし出るこの日の本の光よりこまもろこしも  
春を知るらん 本居 宣長
- 2 春風は吹そめにけりつくばねのしづくの田井  
や氷とくらん 弓屋倭文子
- 3 もしほやく難波の浦の八重霞一重は海土のし  
わざなりけり 桑門 契沖
- 4 木幡山このくれしげき関の戸をさしもこめた  
る夕がすみ哉 清水 光房
- 5 春風の空なるほどは梅の花こずゑのいろも香  
にほひつつ 加茂 祐為
- 6 青柳の糸のみだれをはる風のゆたかなる世に  
忘れずもがな 松平 定信
- 7 月花のあはれをこめて霞むなり梅津かつらの  
春のあけぼの 沖 安海
- 8 角田川みの着てくだす筏士にかすむゆふべの  
雨をこそしれ 加藤 千蔭
- 9 春ごとに見れど桜は春ごとにはじめて見たる  
心地こそすれ 千家 尊孫
- 10 よしの山花さくころの朝なくこころにかか  
るみねの白雲 酒和田正俊
- 11 吉野山かすみの奥はしらねども見ゆるかぎり  
は桜なりけり 八田 知紀
- 12 大原女が折りていでけんあとならしやせ山桜  
かげの細れる 長沢 伴雄
- 13 足柄の八重やまざくら咲にけり春のあらしの  
関もりもがな 小沢 芦庵
- 14 角田川ながき堤も春の日もみじかくなすはさ  
くらなりけり 加藤 千浪
- 15 立よれば花の木かげもかりのやどに心とむな  
とふく嵐かな 佐々 千竹
- 16 やどりして春の山べにねし夜半の夢もまさし  
きあさ嵐かな 本居 太平
- 17 みぞれより雪になる日の心地して春雨しろうく  
ちるさくら哉 仲田 顕忠
- 18 ながめやる空もうき世のほかならじ桜ちる夜  
の山の端の月 山田 久秋
- 19 花は皆移ろひにけりうつせみの常なき世をも  
人に知れつつ 粟田 土満
- 20 古里の野べ見にくればむかしわが妹とすみれ  
の花咲にけり 加茂 真洌
- 21 藤なみの花のさかりはそれながら春は早くも  
暮にけるかな 村田 春郷
- 22 しげりあふ若葉がかげとなる宿は山里めきて  
夏も来にけり 鈴木 重胤
- 23 雨はこぶ外山の里の夕月夜ぬれては来啼くほ  
とゝぎすかな 原 久胤
- 24 あふ坂の山ほとゝぎす過ぬなり関のわやらの  
月をのこして 香川 黄中
- 25 かぐ山ののをのへに立て見わたせば大和くに原  
さ苗とるなり 上田 秋成
- 26 袖にちるはな橋はいにしへのかたみ風のは  
こぶなりけり 香川 景恒
- 27 放ちかふ駒のいなゝく声はしてあら野のみ牧  
夏ふけにけり 石原 正明
- 28 夏川のこなぎおもだか花ちりてすゞしき暮に  
くひな鳴なり 千種 有功
- 29 柴の戸をしぼしぼ叩く水鶏にもはかられぬ身  
と成にける哉 伴 信友
- 30 夏ふかきよもぎが中のかくれがをあらはず物  
は螢なりけり 本間 游清
- 31 人しれぬおもひの露やかゝるらん妹が垣根の  
なでしこの花 熊谷 直好
- 32 角田川夏をはなれてゆく船にちぎらぬ秋をた  
れかのせけん 前田 夏蔭
- 33 かはほりの飛かふ空の夕づく日かげらふ見れ  
ば秋立にけり 富士谷御杖
- 34 みそぎせしあと川柳ひと葉ちりふた葉ながれ  
て秋風ぞふく 清水 浜臣
- 35 おきいでゝ見はてぬ夢のはかなさを思ひくら  
ぶる朝顔の露 中村 良臣
- 36 荒はてしのちはを鹿をあるじにてむかしの庭  
に萩ぞ咲きける 荷田 在満
- 37 きりくす何をうれへて燈火のあかき処に來  
てはなくらん 黒沢 翁満
- 38 雲はきえ月はすみゆく此夜半を何にねよとの  
鐘はうつらん 城戸 千楯
- 39 鳥だにも音せぬ峯にすむものは空ゆく月とわ  
れとなりけり 熊代 繁里
- 40 何にかも見ぬ世の影を見てましと思へば月の  
外なかりけり 萩原 広道
- 41 山高み時雨もいたくふる寺は紅葉にあけると  
ころなりけり 荒木田久老
- 42 のこりなく稻つみ車音さえてさびしき田井に  
冬は来にけり 近藤 芳樹

43 有明の月しづかなる庭のおもに折々おつる木の葉をぞきく  
桑門 湧蓮

44 村がらすねぐらに帰る夕暮にとぶ一むらは木の葉なりけり  
前波 黙軒

45 夜もすがら風に争ふ音すなりはらへばつもる庭のみぢ葉  
齋藤 彦磨

46 今日も又垣根のうばらつたひきて霜ふむ鳥の跡は見えけり  
広沢 長孝

47 てる月のかげのちりくる心地してよるゆく袖にたまる雪哉  
香川 景樹

48 白さぎのみの毛みだるゝ浦風にかれたつ蘆の音むせぶなり  
伴 高蹊

49 はこね山はつ雪しろし都にはいまや御狩のつかひたつらん  
加藤 枝直

50 山ざくら枝もたわゝに降つみて吉野は雪のさかりなりけり  
田中 大秀

51 きゆるまでたゞひとり見る山里の雪の深さを知る人はなし  
河本 延之

52 月にあかし花にくらして雪にいま思ひけぬべくなげく年哉  
本居 内遠

53 雪ふれどやぶ鶯のさゝなきに春のころはもよほされつゝ  
穂井田忠友

54 何となく打なげかるゝ心地かな今日より我や人をこふらん  
富士谷成章

55 嬉しともうしとも恋はきゝしかど胸とゞろくや初なるらん  
岸本由豆流

56 玉銚の道ゆきぶりにたぐへてし心は身にもかへらざりけり  
加納 諸平

57 下もえの煙の空にたちこめてあはれと人の見

58 こよろぎの磯うちさらしよる浪の独くだくる恋もするかな  
神山 魚貫

59 つれなきに絶えもはてなで玉の緒の長さや何の報なるらん  
荷田 信美

60 いかにしてかばかり深く入りにきと跡たどらるゝ恋の道哉  
小山田与清

61 山城のとはに思へど陸奥のいはでしのぶはくるしかりけり  
賀茂 季鷹

62 つま琴のいづれの緒より調べなば我まつ風と人のさかまし  
中山 美石

63 うれしさをつゝむよもなし唐衣袂ゆたかにたつ名のみして  
村田たせ子

64 恋死なん夜半のけぶりの末も猶月にかこちて人やいとはん  
市岡 猛彦

65 人心枯野の舟のはやくよりこがるゝかひもなき身なりけり  
中島 広足

66 山の端のみどりにつゞく大空の色はまちかく見えわたる哉  
千家 尊澄

67 夕ぐれの空はうき身の何なれや見れば思のちぢにそふらん  
小林 歌城

68 心あてに見し白雲はふもとにて思はぬ方にはるゝ富士の嶺  
村田 春海

69 言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも中々よしや雪の不土の嶺  
塙保 己一

70 から人のいつゝの嶽とさす指の爪くはずべき山は富士の嶺  
桑門 義門

71 雲かゝる足鷹山は高けれどはるれば富士のふもとなりけり  
野々口隆正

72 ひく人もひかるゝ人も水の泡のうき世なりけりよどの川舟  
桑門 大綱

73 ものゝふの草むすかばね年ふりて秋風さむしきちかうが原  
河津 美樹

74 ものゝふの命を露とあらそひしあら野のすゑに秋風ぞふく  
石川 依平

75 何となく心安さのまさるかな世は捨ててこそすむべかりけれ  
海野 遊翁

76 大原やむかしの夢のあととへば結びしまゝの庵はありけり  
桑門 澄月

77 我いほはあはたつ雲のおくれなば煙の末も世にはしられじ  
植松 茂岳

78 世中にうらやましきは山里のことなし草のいほりなりけり  
渡 忠秋

79 山里は松の声のみききなれて風ふかぬ日はさびしかりけり  
大田垣蓮月

80 かげぎゆる夕山がらす一声は今日のなごりの雲になくなり  
岩崎 美隆

81 あし垣はかごとばかりのへだてにて心へだてぬ隣なりけり  
村田 春門

82 玉河に玉ちるばかりたつ浪を妹がたつくりさらすとぞみる  
揖取 魚彦

83 飲む酒にやゝあらはれぬおほかたは包みかくせる下の心も  
竹村 茂枝

84 色かはる萩の下葉をながめつゝひとりある身と成にける哉  
小野 古道

85 度会の宮路にたてる五百枝杉かげふむほどは神代なりけり  
伴林 光平

86 君のためちれと教へておのれまつ嵐にむかふ

さくらみの里

野矢 常方

87 かくばかり多くの年はつもれども猶数ならぬ

我身なりけり

本居 春庭

88 塵の世とおもふ心のつもりては身のかくれが

の山と成ぬる

戸田 茂睡

89 思ふ事なくてふる身を人とはぐかたらひ艸に

何をつまし

加藤 枝直

90 うのは空の風にさきだつ塵よりもかろきは人

の心なりけり

荷田蒼生子

91 あすか川明日といひてはながしやる月日にか

くる柵ぞなき

橘 守部

92 弓矢とるわざにかへつゝとる書に心の的をと

ほしてし

橘 冬照

93 たる事をしりたる顔にいひなして世にあはぬ

身の慰にせん

河本 公輔

94 月影はかたぶきてこそすみませれ思へば人は

名こそ惜けれ

藤井 高尚

95 くらゐ山峯なる人をふもととはわがみ吉野の

奥よりぞしる

下河辺長流

96 すみかへん秋に紅葉のさかの山春はよし野の

花のしたかけ

桑門 似雲

97 惑はずはまことの道はしらじかし愚なるこそ

嬉しかりけれ

木下 幸文

98 奥山のきこりが腰にさすときくよきには人の

移らざりけり

井上 文雄

99 世の中は八重山吹の花ごゝろ実なき事のみも

てはやしつゝ

足代 弘訓

100 今日見ればきのふの沖はあさか瀉汐のみちひ

ぞ世の姿なる

荷田 春満

○

〔解説〕明治二十六年一月、博文館刊行の佐佐木信綱編「標註七種百人一首」所収の信綱撰の「近世百人一首」を底本とした。緒言中に、

近世百人一首は、おのれいまだ幼き時、近き世の人の家の集ども何くれと見つるついでに、名高き歌、又名高き人の歌を一首づゝぬき出でつるに、やがて百首にみちたりしかば

時代の順次についてむと思ひしかど、さては同じ頃の人多くて、いづれを古し、新らしと定めがたければ、四季恋雑の題の順によりて前後を定めつるなり。されど、其の名世に高

くて、家集なき人少なからず、さる人々は聞き伝ふるまゝに載せ、又、家集の中よりえりいでしにも、作者の心にはなほ歌なきにし

もあらざるべし。見む人其の心して、こゝに載せたるをすべて其の人の名歌とは思ひとるべからず。

とある。信綱二十歳の撰である。明治廿四年六月、十九歳で父を喪い、遺業をついで同年十二月、日本歌学全書十二巻を完結し、つづいて独力を以て続日本歌学全書の撰輯の志をたて、廿五年三月から七月にわたって、城南評論誌上に

「近世歌学評論」を発表し、着々資料の集収につとめた一方、短歌実作につとめた。軍歌凱旋

「あなうれし」はこの年の作。日清戦争下には軍歌の創作多く、中にも、「勇敢なる水兵」は

ながく国民の間に愛唱された。かくて、明治三十一年一月から同三十三年五月まで二年半にわ

たって刊行をはたした続全書は、わが国における近世和歌の総結集であって、この編著の学界

に寄与したことは、日本歌学全書と相俟って、一方ではないのである。この全書の特徴の一つは、資料を多種にわたって集収するために、屢抄出本のあることで、そこには信綱の短歌評価

における自負と自信があつたのである。この数年にわたって近世和歌に親炙したことが、生涯を通しての近世和歌に関する大きな関心と執心になつたのであると思う。七種百人一首の中に、自撰のものを二種類収め、その中に

「近世百人一首」を撰んだ所以なのである。信綱の明治期の著述の出版予告（博文館）に

「日本歌史」という書目があり、ついに出版に至らなかつた。私はこれを直接信綱に詫言した。信綱は「著述だけを生活の糧とするには、稿料

出版条件が折合わないで思うようにならぬこともありませぬ」と云われた。篋底に部厚い墨書き

の原稿を見たことがあつた。おそらくその中の一部が、大正十二年一月、博文館から出版された「近世和歌史」であろうと思われる。続日本

歌学全書が、近世和歌資料の最初の叢刊であつたと共に、「近世和歌史」はこの分野に鉾を入れた最初のものであつたのである。その後、真

淵、宣長、言道、光平、望東尼、曙覧（煙滅）等の研究、全集等を手がけ、生涯近世和歌への

思いを断たなかつた。「近世名歌選」（昭二三・五）は晩年の労作で、この百人一首と比べて、信綱の短歌に対する考方の変遷が知られる。

修身百人一首

佐々木信綱撰  
明治三二刊

- 1 ますらをの柄の音なり武士のおほまへつ君  
楯立つらしも 元明 天皇
- 2 新らしき年の始に思ふどちいむれてをれば楽  
しくもあるか 道 祖 王
- 3 ふる雪の白髪までに大きみに仕へまつれば尊  
とくもあるか 橘宿禰諸兄
- 4 二人ゆけどゆき過ぎ難き秋山をいかでか君が  
ひとり越ゆらん 大伯 皇女
- 5 白がねもこがねも玉も何せんにまされる宝子  
にしかめやも 山上 憶良
- 6 いまさらに何か思はむうちなびき心は君によ  
りにしものを 安部 女郎
- 7 丈夫は名をしたつべし後の世にきつづく人も  
語りつづがね 大伴宿禰家持
- 8 たたなめていづみの河のみをたえずつかへま  
つらん大宮処 境部宿禰老磨
- 9 神風の伊勢のはま萩をりふせて旅寝やすらん  
あらし浜へに 碁 檀越妻
- 10 我せ子はいづく行らん沖つもの名張の山を今  
日かこゆらん 当麻真人麻呂妻
- 11 大君のみことかしこみいそにふりうの原渡る  
父母をおきて 文部造人麻呂
- 12 押照や難波の津より舟よそひあれはこぎぬと  
妹につげこそ 物部 道足
- 13 君がうゑし一村薄虫の音のしげき野べともな  
りにけるかな 三春 有佐
- 14 底ひなき洲やはさわぐ山河のあさき瀬にこそ  
あだ波はたて 素性 法師
- 15 かたちこそみ山がくれの朽木なれ心は花にな  
さばなりなん 源慶 法師
- 16 老ぬればさらぬ別の有といへばいよく見ま  
くほしき君哉 伊都内親王
- 17 ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をもふ  
かせてしがな 菅原右大臣母
- 18 たらちねの親の守とあひそふる心ばかりはせ  
きなどぞめそ 小野千古母
- 19 梅の花今はさかりになりぬらん頼めし人のお  
とづれもせぬ 兵部卿敦固親王
- 20 いかばかり思ふらんとか思ふらん老てわかる  
るとほき別を 清原元輔朝臣
- 21 世中にうれしきものはおもふどち花見てくら  
す心なりけり 平 兼盛
- 22 諸共にゆかぬみかはの八橋はこひしとのみや  
思ひわたらん 源 嘉種妻
- 23 限あれば我とはそめぬ藤衣なみだのいろにま  
かせてぞ着る 藤原道信朝臣
- 24 思ふこと今はなきかな撫子の花さくばかりな  
りぬと思へば 花山 天皇
- 25 見るまゝに露ぞこぼるる後れにし心もしらぬ  
なでしこの花 上東 門院
- 26 さしのぼる朝日に君を思ひ出んかたぶく月に  
われを忘るな 中納言通俊
- 27 瑞垣の久しかるべき君が代はあまてる神やそ  
らに知るらん 藤原 為忠
- 28 磯菜つむ入江の波の立かへり君みるまでのい  
のちともがな 平 康貞女
- 29 もろこしの代々はうつれど敷島や大和島根は  
久しかりけり 土御門内大臣通親
- 30 おのが身のおのが心になはぬを思はゞ物は  
思ひしりなん 和泉 式部
- 31 去年の春ちりにし花も咲にけりあはれ別のか  
からましかば 赤染 衛門
- 32 わりなしや人こそ人といはざらめ自から身を  
や思ひ捨べき 紫 式部
- 33 いかにせんいくべき方も思ほえず親に先だつ  
道をしらねば 小式部内侍
- 34 我宿の門田のわせのひつち穂を見るにつけて  
も親ぞ恋しき 曾根 好忠
- 35 嬉しさをかへすぐもつゝむべき苔の袂の狭  
くもあるかな 入道前中納言雅兼
- 36 諸神のころに今ぞかなふらん君を八千代と  
祈るまことは 藤原季経朝臣
- 37 君が代にあへるは誰もうれしきを花は色にも  
出にけるかな 刑部卿範兼
- 38 唐土もあめの下にぞありときくてる日の本を  
忘れざらん 成尋法師母
- 39 君が代は千尋の底のさざれ石の鶉のゐる磯と  
頭はるゝまで 三位源頼政
- 40 神こそは野をも山をも造りおけ人にまことの  
道をふめとて 後九条内大臣基家
- 41 あきつしま神の治むる国なれば君しづかにて  
民もやすけし 源 仲綱
- 42 薩摩鴻沖の小島にわれありとおやには告げよ  
八重のしほ風 平 康頼

- 43 もののふのとりつたへたる梓弓ひきては人の  
かへす物かは 平 景高
- 44 夜を寒みねやの衾のさゆるにもわら屋の風を  
思ひこそやれ 後鳥羽天皇
- 45 大空のおもはん事もはづかしなさし仰ぎつつ  
かくて過ぎば 前大僧正慈鎮
- 46 山は裂け海はあせん世なりとも君に忒心わ  
れあらめやも 鎌倉右大臣実朝
- 47 神垣や三室のさか木ゆふかけて祈る八千代も  
たゞ君のため 権大納言実雄
- 48 我君を松の千年といのるかな代々につもりの  
神のみやつこ 津守 国平
- 49 足乳根の在ていめしき言の葉はなき跡にこそ  
思ひしらるれ 前大納言為氏
- 50 勅なれば身をばよせてき物部の八十氏川の瀬  
にはたたねど 鏡 月 坊
- 51 万代をまつ尾山のかげしげみ君をぞ祈ると  
きはかきはに 一宮 紀伊
- 52 仕へつゝ家路いそがぬ夜なくの更ゆく鐘を  
雲るにぞきく 前大納言良教
- 53 すべらぎの神の御言をうけきつゝいや継々に  
世を思ふかな 龜山 天皇
- 54 足乳根の在し其世にあはれなど思ふばかりも  
仕へざりけん 天台座主道玄
- 55 天の下のどけかるべし難波瀉たみのゝしまに  
御稜しつれば 津守 国経
- 56 あきらけき月の夜にしも子を思ふ心のやみの  
鶴はなくなり 中原朝臣康富
- 57 君をこそ朝日とたのめ古里にのこすなでしこ  
もひなしとは 二品法親王慈道
- 58 霜にからすな 阿 仏 尼
- 59 あまつ神くにつ社をいはひてぞわがあし原の  
国はをさまる 後宇多天皇
- 60 いたづらに安き我身ぞはづかしきくるしむ民  
の心おもへば 伏見 天皇
- 61 民やすく国ゆたかなる御代なれば君を千年と  
誰かいのらぬ 一条内大臣実
- 62 さきだちてきえぬる露の命にもかはらで残る  
老が身ぞうき 前大納言為世
- 63 春日山ときはの松のかげにゐて猶すべらぎの  
千年いのらん 入道前太政大臣女
- 64 住吉の神に仕ふる身にしあれば君をぞ祈るよ  
ろづ代までに 津守 国清
- 65 今はやおぼえず年も暮にけり身を忘れつつ  
仕へこしまに 前大納言有光
- 66 道を知り人を知る世の治まりて君になびかぬ  
草も木もなし 権中納言政顕
- 67 神風にみだれし塵もをさまりぬ天照す日のあ  
きらけき世は 花園 天皇
- 68 世治まり民安かれと祈るこそ我身につきぬお  
もひなりけれ 後醍醐天皇
- 69 てりくもり寒きあつきも時として民に心のや  
すむまもなし 光厳 天皇
- 70 片岡の岩根の苔路ふみならしうごきな世を  
なほ祈るかな 賀茂 惟久
- 71 わが心君ぞしるらん世を祈るほかに又もお  
もひなしとは 二品法親王慈道
- 72 子を思ふ涙くらべば夜の鶴われおとらめやね  
にたてずとも 後三条前内大臣実忠
- 73 色かへぬ黒髪山の山かつらかくてやひさにつ  
かへまつらん 従二位行家
- 74 君が世を祈る心のまことをばいつはりなしと  
神はうくらん 従三位常昌
- 75 思ひやれ子をおもふ鶴の一つがひおなじねに  
なく夜の心を 藤原 基任
- 76 限なく世をこそ照らせ空にすむ月日や君がみ  
かげなるらん 権大納言忠光
- 77 鳥の音におどろかされて暁のねざめしづかに  
世を思ふかな 後村上天皇
- 78 ありて身のかひやなからん国の為民の為にと  
思ひなさずば 中務卿宗尊親王
- 79 君のため世のため何か惜からんすてゝかひあ  
る命なりせば 中務卿宗良親王
- 80 君がわがとりきつるあづさ弓もとの都にか  
へさざらめや 前内大臣隆俊
- 81 おきみつゝ君をいのれば神垣に心かよはぬあ  
かつきもなし 従二位隆基
- 82 難波江や葦間の浪のよるの鶴子を思ふ道はさ  
はずもがな 権大納言公夏
- 83 いとせめて老ぬる身こそ悲しけれこの別路を  
限とおもへば 右近大将長親
- 84 君を祈る道にいそげば神がきにはや時つげて  
鳥もなくなり 津守 国貴
- 85 都には君をのみこそ思ひいづれ紅葉のをりも  
花のさかりも 橘為忠朝臣
- 86 あはれなり日影まつまの露の身に思ひおかる



新撰婦人百人一首

佐佐木信綱撰  
大正五年一月

- 1 さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ち  
てとひし君はも 弟橋比売命
- 2 ありつつも君をば待たむ打ちなびく我が黒髪  
に霜のおくまでに 磐之媛皇后
- 3 吾が背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のお  
こなひ今宵しるしも 衣通 媛
- 4 日下江の入江の蓮はなはちす身のさかり人羨  
しきろかも 赤猪子
- 5 牧方ゆ笛吹きさのぼる近江のや毛野のわく子が  
笛吹きさのぼる 毛野 臣妻
- 6 天の原ふりさけ見れば大君の命は長く天足ら  
したり 倭姫王
- 7 熟田津に船乗せむと月まてば潮もかなひぬ今  
は漕ぎ出でな 額田王
- 8 河の上のゆつ磐群に草むさず常にもがもなと  
こをとめて 吹黄 刀自
- 9 北山につらなる雲の青雲の星さかりゆき月も  
さかりて 持統 天皇
- 10 わが岡のおかみにいひて降らしめし雪のくだ  
けし其処に散りけむ 藤原 夫人
- 11 二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君  
が一人越えなん 大伯 皇女
- 12 な思ひそと君は言へども逢はむ時いつと知り  
てか吾が恋ひざらん 柿本人麿妻
- 13 神風の伊勢の浜荻折りふせて旅寝やすらむ荒  
き浜辺に 碁 檀越妻
- 14 君なくばなぞ身よそはむ櫛笥なる黄楊の小櫛  
もとらむとも思はず 播磨 娘
- 15 わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水に  
も我なけく 安倍 女郎
- 16 人皆は今長しとたけといへど君が見し髪乱  
れたりとも 園生 羽女
- 17 吾が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山  
を今日か越ゆらむ 当麻麻呂妻
- 18 大船に真かざし貫きこの吾子を唐国へやる  
いはへ神たち 光明 皇后
- 19 久方の天の露霜おきにけり家なる人も待ち恋  
ひぬらむ 大伴坂上郎女
- 20 夕暗は道たづたづし月待ちていませ吾背子そ  
の間にも見む 大女 宅
- 21 みちのくの真野のかや原遠けども面影にして  
見ゆといふものを 笠 女郎
- 22 君が行く道の長手をくりたたね焼き亡ぼさむ  
天の火もがも 狭野茅上娘子
- 23 旅人のやどりせむ野に霜ふらば吾が子はぐく  
め天の鶴群 遣唐使人母
- 24 君が行く海への宿に霧立たば吾が立ちなげく  
息と知りませ 遣新羅使人妻
- 25 信濃路は今の墾道かりばねに足ふましなむ履  
はけわが背 東人妻
- 26 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しざ  
物思ひもせず 防人妻
- 27 色見えでうつろふものは世の中の人の心の花  
にぞありける 小野 小町
- 28 やや待て山ほととぎすことづてむわれ世の  
中に住みわびぬとよ 万国のまぢ
- 29 久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせ  
てしがな 菅原道真母
- 30 たらちねの親の守りと相添ふる心ばかりを関  
などどめそ 小野千古母
- 31 難波なるながらの橋もつくるなり今はわが身  
を何にたとへむ 伊勢
- 32 大空を照りゆく月し清ければ雲かくせどもひ  
かりけなくに 尼 敬信
- 33 たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし桜  
もうつろひにけり 藤原因香朝臣
- 34 勅なればいとまかしこし鶯の宿はと問はばい  
かが答へむ 紀 貫之女
- 35 袖ひぢて植ゑし春よりまもる田を誰かは知ら  
でかりに来つらむ 中 務
- 36 琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒より  
しらべそめけむ 斎宮女御
- 37 誰となくひとつにのりの役にてかなたの岸に  
つくよしもがな 選子内親王
- 38 思はじと心をもどく心しもまだひまさりて恋  
しかるらむ 賀茂保憲女
- 39 明けぬるか河瀬の霧のたえだえにをち方の人  
の袖の見ゆるは 源 経信母
- 40 おもひせく胸のほむらはつれなくて涙をわか  
すものにぞありける 右大将道綱母
- 41 見るままに露ぞこぼるるおくれにし心も知ら  
ぬなでしこの花 上東門院
- 42 物おもへば沢の螢もわが身よりあくがれいづ  
る魂かとぞみる 和泉 式部

43 越え果てば都も遠くなりぬべし関の夕風しば

の袖の涙に

藤原俊成女

72 賤の女がおりたつ小田の水鏡みるひまもなく

し涼まむ

赤染 衛門

58 うすくこき野辺の緑のわか草に跡まで見ゆる

とる早苗かな

梶 女

44 春の日のうららにさしてゆく舟は棹のしづく

雪のむらぎえ

宮内 卿

73 安からぬ世の営みや朝な朝なうることのみ

も花ぞちりける

紫 式部

59 吉野山みねのしら雪踏みわけて入りにし人の

いそぐ市人

百 合子

45 その人の後といはれぬ身なりせば今宵の歌は

あとぞ恋しき

静

74 わきてなほ夕べは池のうきにすむおもひあり

まづぞよまゝし

清 少納言

60 露とのみ消えにしあとを来てみれば尾花が未

てや蛙なくらむ

荷田 貝子

46 いかにせんいくべき方もおもほえず親にさき

に秋風ぞ吹く

虎

75 雨たたく柴のとぼそのうちにして楽しむ心人

たつ道を知らねば

小式部内侍

61 うらめしや誰をたのめと捨ててゆく我を思は

知るらめや

井上 通子

47 はるかなる唐土までもゆくものは秋のねざめ

ばとく帰り来よ

塩谷朝業女

76 近からば行きても見まし棚機の稀のわたりの

の心なりけり

大式 三位

62 雲かかる小夜の中山越えぬとは都につげよ有

船のよそひを

荷田蒼生子

48 まどろまじ今宵ならではいつか見むくろとの

明の月

阿 仏 尼

77 おもなくも照らせる月の光かな中なる人やい

浜の秋の夜の月

菅原孝標女

63 木々の心春近からし昨日今日世はうすぐもり

かが見るらむ

油谷倭文字

49 住みわびてわれさへのきのしのぶ草忍ぶかた

春雨の降る

永福 門院

78 いはけなくいかなるさまにたどりてか死出の

がた多き宿かな

周防 内侍

64 今日さは唐国人も君が代を天つ空ゆく雲に

山路をひとり超ゆらむ

土岐筑波子

50 三島江の玉江の真菰夏刈りにしげくゆきかふ

知るらむ

日野 資子

79 ひざの上に指ざして見し古への秋の月こそ悲

遠近の舟

相 模

65 めぐりあふちぎりならずは中々にうきを見は

しかりけれ

鶯殿余野子

51 もろこしも天の下にぞありと聞く照る日の本

てぬいのちともがな

文 貞公室

80 うち霞む垣根にかへる梅が香にさそひし風の

を忘れざらなん

成尋阿闍梨母

66 み吉野は見しにもあらず荒れにけりあだなる

絶間をぞ知る

荒木田麗女

52 ながめわびぬ秋より外の宿もがな野にも山に

花はなほのこれども

新待賢門院

81 秋に見し紅葉は夢かうつの山まだ二葉なるつ

も月やすむらむ

式子内親王

67 何ならぬ草木の色もあはれなり思ひある身の

たの細道

山梨志賀子

53 春風の霞吹きとく絶間より乱れてなびく青柳

夕ぐれの空

妙光寺内大臣室

82 春の夜は霞にこめてあかしたも須磨とも見え

のいと

殷富門院大輔

68 諸共にさえはつるこそ嬉しけれおくれ先だつ

ぬ浦の月かけ

小津美濃子

54 世にふるは苦しきものを楨の屋にやすくも過

ならひなる世に

別所長治妻

83 吉野山雲も恨みも晴れにけり花の盛の春にあ

ぐる初時雨かな

讚 岐

69 さらぬだにうちぬる程もなつの夜の別をさそ

ひつつ

頼 梅颯

55 しきみつむ山路の露にぬれにけり暁おきのす

ふほととぎすかな

小谷の方

84 はし近く独ながむる夕庭に風をも染めて散る

みぞめの袖

小 侍 従

70 あかざりし花に心をのこしつづ我が身は宿に

紅葉かな

伊達満喜子

56 月をこそ眺め馴れしか星の夜の深きあはれを

かへりぬるかな

小 野 通

85 あかぬかな月すむ空に散る紅葉桂の花の心地

今宵知りぬる

建礼門院右京大夫

71 夫や子の待つらむものを急がまし何か此の世

のみして

横山 桂子

57 おもかげのかすめる月ぞ宿りける春やむかし

に思ひおくべき

小野寺丹子

86 夜のほどの野分も知らず咲きにけり窓にとり

いれし朝顔の花

柳原 安子

87 あづさ弓岩をもとほす心もてますらたけをの  
思ひたわむな 児島草臣母

88 旅衣夜寒をいとへ国のため草のまくらの露を  
はらひて 野村望東尼

89 日々日々にかはる旅路にかはらぬは人の心の  
まことなりけり 村岡 矩子

90 天がける魂の行方は九重のみはしのもとを猶  
やまもらむ 大橋 卷子

91 もののふのたけき心にくらぶれば数にもいら  
ぬ我が身ながらも 中野 竹子

92 惜しましな君と民との為ならば身は武蔵野の  
露と消ゆとも 静寛院宮

93 めせめせと炭うる翁声かれて袖に雪ちる年の  
くれがた 大田垣蓮月

94 思ひあがり雲にまじりて遊べども世に繋がる  
る糸は離れず 高島 式部

95 位山のぼるにつけて思ふかなあはれいまさば  
あはれあらばと(藤湖贈位) 徳川 吉子

96 中垣の隣の花の散る見てもつらきは春の嵐な  
りけり(丁汝昌を悼む) 樋口 一葉

97 霜をへて匂はざりせば百草の上には立たじし  
ら菊の花 税所 敦子

98 つはものにめし出されし吾背子はいづこの山  
に年迎ふらむ 大須賀松江

99 いでまして帰ります日となしと聞く今日の行  
幸にあふぞ悲しき 乃木 静子

100 浅しとてせけばあふるる川水のこころや民の  
心なるらむ 昭憲皇太后

○

〔解説〕大正五、六年頃の婦人雑誌の正月に寄稿したもの。はじめ緒言がある。

一人の作者が百首の歌を詠むことは、既に平安時代からあった事で、源重之や女歌人相模の詠んだ百首に初まって、平安末期の流行となったのであるが、多くの歌人の中から、一人一首づつを選び出して百首を揃へるといふ事は、鎌倉時代の初期に、藤原定家が色紙に書いて、中院入道蓮生の嵯峨の山荘の障子に貼り付けたといふ、所謂小倉百人一首を以て最初のものとする。これは百首歌流行の影響と思はれる。しかして、室町時代から江戸時代にかけて、定家の尊信と、歌留多の流行から、我も我もと百人一首を撰述することが行はれ、零細なものまでを集めると、その数が数百種に上るといってもよい程である。その様なわけで、婦人の歌だけを集めたものにも、女百人一首があり、烈女百人一首などいふたぐひも出来てゐる。

その上に更に一つの百人一首を加えることは、屋上屋を架するの嫌ひはあるが、自分は今に新たに撰んで、真に日本婦人百人一首といふに相応しいものを撰んで見ようとしたのである。その範囲は、広く上代より明治末期までの間に取り、且つ作者も、歌人として有名な人のみでなく、歴史上の人物や、ある時代ある人物を背景に持った人や、伝説にもてはやされた人々までを網羅したのである。例

へば記紀における仁徳帝皇后、衣通姫、万葉の額田王、狭野茅上娘子、古今の小野小町、伊勢、新古今の式子内親王、宮内卿、新集集の文貞公室。歴史的人物として光明皇后、小谷の方、偉人の母として、菅原道真の母、頼山陽の母、勤王の烈女に、野村望東尼、村岡矩子、文芸の人として小野お通、伝説にうたわれた人としては静や虎まで取った。

しかしてその歌は文芸的立場から採ることを主として、敢て教訓の意義を附会しようとしたのではないが、その点も欠陥を避けるようにつとめたつもりである。

撰定の趣旨を述べてある。更にこれらの歌は次号から評釈を試みる由をいい、新年号に全歌をかゝげたことを断つてある。婦人雑誌は、「婦人世界」か「婦女界」又は「主婦の友」といった雑誌に掲載されたもので、大正の極く初めころのものであった。

信綱は、東京大学非常勤講師のほか、稀に私立大学に講義を持ったこともあったが、一切の官途につかなかつた。恒産を持たず、生涯を在野の学者とし、著述と和歌の教授指導の道に生活を買いたのであった。温厚な性格と、広く深くおののかじしの指導原理のもと、時に門弟二千と称されたが、中にも名流婦人の竹柏園の門に入る者が少くなかつた。「和歌に志す婦人の為」に」という著もある。門下からは、柳原白蓮、九条武子、河杉初枝、片山広子、富岡冬野、五島美代子など女流歌人を出した。

竹柏園百人一首

佐佐木信綱撰  
大正六年一月

- 1 緋の房の襖はかたくとざされてけふもさびしく物おもへとや 秋の夜(九条武子)
- 2 うごかざる動物園の展望車白く光れり秋空の下 朝場 重三
- 3 賤たまきいやしき身にもかしこさの身にしみとほる神の大前 芦沢 松子
- 4 晩稻刈りて見る目さびしき冬の田にかがやかしくもさす夕日かな 芦田 草堂
- 5 はれくもる人の心に似もやらで雲より上に月はすみけり 相沢 求
- 6 をさながら窓のそとものさやぎにも君とある心みだれくるしき 新井 洸
- 7 夕づつも見えそめにけり舟人はマストランプの綱ひきにけり 石樽 千亦
- 8 子もり唄しづかにうたひそひ臥せばほの柔かうながるる涙 石井 衣子
- 9 大いなるいくさの後に領したる大いなるものをほこりかに持つ 岩田 政子
- 10 つゆ時のどんより空に黄ばみたる枇杷の実一つ地におちてけり 今田十五郎
- 11 いささかの夢にいこへる吾が心さめよとゆるまぼろしよ何 印東 昌綱
- 12 まもりませ笛の歌口まもりませ一千年の家のみおやたち 上 真行
- 13 支那つばめ高梁のはらをむれ飛びぬ草いぎれする八月の空 上田 次子
- 14 見はるべき腫つかれぬ美しき国をのがれて暗にねむらむ 大河内国子
- 15 夕べ夕べ鼻来鳴く山里に冬ごもりしてさて何を待つ 奥村 岸子
- 16 時々ほのかにわかき気もにじむそぼふる雨のさびしき夜かな 大沢 国子
- 17 花の荷をとめたるあさの窓のほとりうるてかふ手のうつくしきかな 大塚楠緒子
- 18 旅にありてたゞ一人子をただ一人みとりする身に初秋は来ぬ 大村八代子
- 19 雨あがり白きつつじのちらばりてほのかに土のほふ初夏 片野 珠子
- 20 野をあゆむ我もめづらしうらゝなる天つ青ぞらわが上にあり 片山 広子
- 21 緋ちりめんの襟かけた子に逢ひしかばかういねたみにはせてかへりぬ 河杉 初子
- 22 月の夜を魚板の音か等持院かどの小家にわらなど打つか 川田 順
- 23 ともしれば吸はるゝやうなひとみしてわがエリキダは春の海みる 樺山 常子
- 24 はなし声は谷畑うてる百姓の昼休みと知りなつかしみけり 木下 利玄
- 25 たへ忍ぶ心よわりてうきこともうれしきことも色に出でにけり 木村 泰子
- 26 下総は松の木の間の薄もみぢ十一月をあたたかき山 久保 勇子
- 27 おのれなほ己が心にあきたらぬ此のわれにして何を思ふぞ 小林 直子
- 28 黄昏の山のはざまにおりて来て花ぐしの如に ほふともし火 小柳 渡風
- 29 吾か泪うるはしつよし日輪の空にかがやくひかりのごとし 西郷 春子
- 30 雪ばれの空しき林あかあかと日のさすなべにたたく啄木鳥 斎藤 瀧
- 31 海原ゆ潮みちくれば大利根のあさ瀬泡だち小魚さばしる 桜井 常吉
- 32 音もなくくれゆく山にむかふときそぞろに吾の尊くおぼゆる 佐佐木信綱
- 33 野か山かしらず木かげかわがせこのこよひのやどに照るかこの月 佐々木春尾子
- 34 和歌の浦に老をやしなふあしたづは雲の上をもよそにみるかな 佐佐木弘綱
- 35 熱き頬を風に吹かせて思へらくこの酔ひ心地われのみぞしる 佐藤 秀信
- 36 夕風に吹きさそはれて出でにけりさしてゆくべき方はなけれど 里井柳枝子
- 37 天の上にとふ麻尼の玉を得つ大よそ人のまさごの中に 沢 式
- 38 半より裂きすてられていづちいにし夢の絵巻のうつくしかりき 三条千代子
- 39 せばけれど草花植うる園もあり足ること知りてわが世すぐさむ 塩谷 雅子
- 40 とある声ふと耳に入りおどろきぬいづこにゆくとおゆみし心 新開 竹雨
- 41 呉淞に夜明につけば大陸は霧のうすものかけて眠れり 白岩 艶子
- 42 我が庵は膝をいるるに余りありいざ宿かさむ 峯のしら雲 釈 宗演

- 43 つくづくと六時の汽車のかなしけれ黙つた人  
の一ぱいに乗る 角 鷗東
- 44 世の中はただゑみてのみすごきなんうさには  
人のうとくなるべき 関屋 愛子
- 45 静かにも物をおもはむ一時のほしと思へり春  
くるる雨 高木 篤子
- 46 草木みな黄にうらがれて武蔵野の夕日しづか  
にはつ冬に入る 高木 真藤
- 47 時鳥ほがら／＼としらみゆく沖にならべり船  
十ばかり 高桑 文子
- 48 鐘の声霞をもるゝ春の夜のしら／＼あけにう  
ぐひすの鳴く 高田 相川
- 49 鹿のむれにわれもまじりて春日野に入日のか  
げを惜しみつるかな 高田 雪子
- 50 公孫樹もみぢちりしく石のきざはしに鳩が入  
まつ朝のみやしろ 高橋 旭村
- 51 果樹園の初鋏入れにいでし土うてばくづるる  
霜ばしらかも 高橋 刀畔
- 52 人皆のさわぐが中に何となくうつら／＼と花  
をみしはや 高柳 義方
- 53 夜一夜うまいしければ気もすがに力あふれて  
思ほゆるかも 武井 大助
- 54 我が心日々にまもりて年をへぬむなしかりき  
や尊かりきや 橋 糸重子
- 55 天地をゆるするばかりの神風もなびく小草は仆  
さざりけり 館 忠資
- 56 葎つむ三宅小島の島少女長きくろかみ吹く春  
の風 丹波 貞子
- 57 むらぎもの清きをまもる心からすべなき恋を  
思へばくるしも 寺田 憲
- 58 呉竹の世は安らけしうき節もうれしき節も神  
にまかせて 徳富 久子
- 59 打ちよりにとりちらしたる衣たたむゆふぐれ  
どきをひぐらしの鳴く 戸沢 錦子
- 60 若き日はいとみじかけれ少女らよ今をたのし  
め今をよろこべ 外山 隆子
- 61 貝加爾のみづうみかたく氷りなばわれやわた  
らむかれや来たらむ 中岡 黙
- 62 天地のむなしき中に吹きおこる風の力のつよ  
くしありけり 西 升子
- 63 さみどりの葉ごしにみゆる富士のねとわくら  
はに逢ひし君がままと 乗竹ろく子
- 64 そむきあふけふの夕べのたへがたな地震ふり  
て人もわれもほろぼせ 長谷部和子
- 65 タづく日おつる野道を銃もちてかたらひゆく  
は都人かも 長谷川時雨
- 66 今日も又霞のおくにしづむ日に安養界をねが  
ひ思へり 服部 綾足
- 67 大いなる帝の道をゆたけくも高歩ましゝわが  
大君はも 原 三溪
- 68 ほゝゑめる梅の花さくすがたさへきみに似た  
るがかなしけり 原田 嘉朝
- 69 万代のかげこそこもれたから田の千代田の宮  
の松のむら立 東久世通禧
- 70 吾はここに神はいづくにましますや星のまば  
たきさびしき夜なり 白 蓮
- 71 白雲のかたまり光る下にして山はほうけて長  
くつづけり 平田 松堂
- 72 不二の嶺を老松のひまに仰ぎみつゝ日ごとま  
かでし磯辺こひしも 弘田 長
- 73 何物もよそはず祖師にまむかひぬ三悪道のさ  
かひに立ちて 牧田君代子
- 74 桃ちるや築地のかへのうすぐめり雨にくれゆ  
く春の夢殿 間島 弟彦
- 75 深川のはこはゆふべの油ぼり一人ぼつり魚  
つるがみゆ 間島 琴山
- 76 秋の空ゆく風雲の足はやみ会津の湖は波たち  
さわぐ 松平 乗統
- 77 粉雪ふるいかだの上を白鷺がひよいひよい歩  
む上木場の堀 松本 徳子
- 78 ゆく春の朝日ゆふ日もやどしめてくれなるに  
ほふふかみ草かも 万里小路通房
- 79 水無月の大日輪は租界地のあかき煉瓦をてり  
おろすかな 前田 利定
- 80 我が故郷小魚が遊ぶ川岸に土筆生ひしやよめ  
な萌えしや 真鍋 教子
- 81 うつし世の千年もゝ年何かあらむとこしなへ  
に人は生くべくありけり 三浦 守治
- 82 大杉のつめたきかげに小さな巫女二人居ぬ  
鹿の目に似し 三角幾代子
- 83 行けど行けど荒野ひろ原はてしなくやすらふ  
かげもなきわが世かな 峯 百合子
- 84 何すねてかくは泣くらむ幼な子の道の真中に  
まろびたるまゝ 村上 栄子
- 85 三等室物しり人はつねにぬすみにわらへる  
人もまじりぬ 八木 善文
- 86 朝日さす高き枯木の上つ枝にむねさしのべて

山鳩鳴くも

山川 桃崖

87 身にしめてなつかしめども遠永にわれとはる

けき星にやはあらぬ

山川 柳子

88 むらさきにかすむ小雨はいそ松のしづくとな  
りて沙をうがちぬ

山田 三秋

89 天の原ほがらにはれて照る月の光のほかにも  
のなかりけり

山辺 定子

90 青き海もの思ふ子がうつたへもしらぬとやう  
にあるがさびしき

山尾 末子

91 荒れはてし秋篠寺のいにしへをかたりがほな  
る松の一もと

横井 時冬

92 くらがねはみがくあとよりさびぬれどさびぬ  
るあとゆなほもみがむ

吉田 又七

93 広き野のはてに日は入るプラタナスの並木の  
落葉ふみてかへれば

藁谷三佳子

94 破れたる胸にはうつるかげもなし空ゆく雲の  
うき秋のいろ

井関 照子

95 人のすまぬ島はあれども天のした神のいまさ  
ぬ島なかりけり

井上 公二

96 軒ちかき楓のわか葉いろ深み我がくろかみも  
みどりにそまむ

岡部 悦子

97 秋の風大野をふきてますらをの涙のあとに芥  
子の花さく

尾崎 行雄

98 忍び得ぬ涙ぞつらき身は早くなきものところ  
思ひすてしを

小幡八重子

99 徐ろに吹けよおひ風親子三人世わたる舟の小  
さなる帆に

小花 清泉

100 雨あられふりくる弾丸に身をすてしますすらを  
ありてけふはありけり

小原 頼之

○

〔解説〕大正六年一月号「心の花」は、附録として、佐佐木信綱撰、石樽千亦書の「竹柏園百人一首」の歌留多の読札取札が添えられている。同月誌上には、「竹柏園百人一首について」という信綱の文章がある。

こたびとみに思ひおこして、石樽ぬしとはかり、竹柏園百人一首を心の花新年号の附録に撰び、石樽氏の能書をわづらはして、直ちに歌がるたに作り得るやうになしつ。収むる所の男女各五十人、故人をも加ふることなしつ。かく人数を限らざるを得ざりし為に、入れまほしき人にして已むを得ず省きしも尠からず。又選びつる歌に於ても、一々作者に就いてその得意の作を問ふいとまなかりき。是れ等をはじめ、不備の点については、切に作者及び読者諸君の寛恕を乞ふ。されど、古くは亡父の門人たりしわが社の先輩より、近くは現在新進の作家にいたるまで、その範圍を網羅し得たれば、思ふに竹柏園百人一首として、後に伝へらるるに足るべし。なほ洩れたる人々は、竹柏園続百人一首として、またの年の付録にもすべし。

歌はすべて詞書を省きつれば、或ものいたりては特に説明する必要あらむ。ここに数首を挙ぐべし。斎藤氏のは北海道、朝場氏のは関西、松本ぬしのは深川の木場、奥村ぬしは紀伊熊野、上田ぬしは大連、間島氏のは深川に住みての作なり。また前田氏及び白岩ぬ

しのは支那旅行中の作。尾崎氏のはオートルロオの古戦場を過ぎての作、藁谷ぬしのは米國にての作なり。又弘田氏のは沼津にて皇孫殿下に奉仕せしそのかみを思出でての作。武井氏のは横須賀工場に在任せし時の作。吉田氏のは、水兵生活の親しき経験よりなれるもの。大村ぬしのは安房に病児を看護りしての作。中岡氏のは三十七八年戦役当時の作。佐々木ぬしのは出征中の夫君を思ひての作。小原氏のは凱旋式の作。而して上氏のは「宮中正殿の舞樂に笛の音頭仕うまつりて」といふ詞書ある連作の一首なり。

とある。今から五十四年前になる。同門の人々であるので、私にとつてはなつかしい。私の竹柏園入門は昭和四年で、今から四十二年前になる。それより十二年前の撰で、面晤のある人々が多い。然し、今生存している人は河杉初子、武井大助、三角幾代、山川柳子など数氏にすぎない。最近山川柳子の歌集「母と子」の寄贈をうけた。昨年八十八歳になられたという。共に歌会などで屢々顔を合わせ、同門の片山広子夫人と共に私の尊敬する先輩である。更に五十余年を詠みつゞけられた。

昂奮にあからめる顔若々し、出征兵士らみな生きて帰れ  
男の子らは子を生まざれば母の子を捕りて戦に狩り出すなり  
老に至ってなお、きびしく一すぢの心が貫かれて

西山百人一首

佐佐木信綱撰  
昭和二十八年頃

- 1 八雲たつ出雲八重垣妻こみに八重垣つくるそ  
の八重垣を 須佐之男命
- 2 いかるがの富のを川の絶えばこそわが大君の  
御名忘らえぬ 巨勢 三杖
- 3 ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり  
見すれば月かたぶきぬ 柿本人麻呂
- 4 信濃路は今のほり道かりばねに足踏ましなむ  
履はけわが背 東人の 妻
- 5 銀も黄金も玉も何せむにまされる宝子にし  
かめやも 山上 憶良
- 6 わかの浦に潮満ちくれば鴻を無み葦べをさし  
て鶴鳴きわたる 山部 赤人
- 7 葛飾の真間の井見れば立ちならし水汲ましけ  
む手児奈し思ほゆ 高橋虫麻呂
- 8 妹として二人作りしわが山斎は木高く繁くな  
りにけるかも 大伴 旅人
- 9 旅人の宿りせん野に霜ふらばわが子羽ぐくめ  
天の鶴群 遣唐使人母
- 10 桶は実さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどい  
や常葉の樹 聖武 天皇
- 11 春の苑くれなゐにほふ桃の花した照る道に出  
でたつをとめ 大伴 家持
- 12 父母も花にもがもや草枕旅は行くともささご  
てゆかむ 丈部 黒当
- 13 から衣きつつなれにしつましあればはるばる  
きぬる旅をしぞ思ふ 在原 業平

- 14 たらちねの親の守りと相添ふる心ばかりは関  
などどめそ 小野千古母
- 15 久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせ  
てしかな 菅原道真母
- 16 底ひなき洲やはさわぐ山川の浅き瀬にこそあ  
だ波は立て 素性 法師
- 17 結ぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に  
別れぬるかな 紀 貫之
- 18 筑波山端山しげ山しげけれど思ひ入るにはさ  
はらざりけり 源 重之
- 19 春の日のうららにさしてゆく舟は棹のしづく  
も花ぞちりける 紫 式部
- 20 もろこしも天の下にぞありと聞く照る日の本  
を忘れざらん 成尋阿闍梨母
- 21 吹く風をなこそその関と思へども道も狭にちる  
山ざくらかな 源 義家
- 22 み山木のその梢とも見えさりし桜は花にあら  
はれにけり 源 頼政
- 23 ありそ海の波間かきわけて潜く海士の息もつ  
きあへず物をこそ思へ 二条院讚岐
- 24 さつま潟沖の小島に我ありと親にはつげよ八  
重の潮風 平 康頼
- 25 吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の  
花をたづねむ 西 行
- 26 またや見む交野のみ野の桜狩はなの雪ちる春  
のあけぼの 藤原 俊成
- 27 むかし誰かか桜の種をうゑて吉野を春の山  
となしけむ 藤原 良経
- 28 春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるる横

- 雲の空 藤原 定家
- 29 明けばまた越ゆべき山の峯なれや空ゆく月の  
すゑの白雲 藤原 家隆
- 30 道すがら富士の煙もわかざりき晴るまもな  
き空のけしきに 源 頼朝
- 31 箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島  
に波のよる見ゆ 源 実朝
- 32 手折らじな人の垣根の梅の花われにてしりぬ  
惜しき心は 寂 身
- 33 四方の海波をさまりてのどかなるわが日の本  
に春は来にけり 龜山 上皇
- 34 いたづらに安きわが身ぞはづかしき苦しむ民  
の心おもへば 伏見 天皇
- 35 朝風にすずき釣りにや淡路鴻波なき沖に船も  
出づらむ 頓 阿
- 36 夜も憂しねたく吾が背子はては来ずなほざり  
にだにしはしとひませ 兼 好
- 37 わがいほは松原つづき海近く富士の高嶺を軒  
端にぞみる 太田 道灌
- 38 としつきを心にかけてし吉野山花のさかりを今  
日見つるかな 豊臣 秀吉
- 39 西の海やその船よそひとくせなん秋くれ方の  
波の寒さに 細川 幽斎
- 40 いづくより何のためとか野を遠み尾花にまじ  
り人一人ゆく 藤原 惺窩
- 41 行く川の清き流れにおのづから心の水もかよ  
ひてぞ澄む 徳川 光圀
- 42 国をささげ家をもおひてゆく虫の力まことに  
牛にまされり 下河辺長流

- 43 初瀬のや里のうなるに道へばかすめる梅の立  
枝をぞさす 契 沖
- 44 学び得ぬもろこしの書やまと歌道はかたがた  
こころぞせども 北村 季吟
- 45 熊にあらず虎にもあらず浅草におきふす我を  
たれか知るべき 戸田 茂睡
- 46 賤の女がおりたつ小田の水鏡みるひまもなく  
とる早苗かな 梶 女
- 47 行くべくはいづくか道のあらざらむ心に草の  
しげらずもがな 三輪 執斎
- 48 もろこしの人に見せばやみ吉野の吉野の山の  
山ざくら花 賀茂 真淵
- 49 学ばでもあるべくあらば生れながら聖にてま  
せどそれ猶し学ぶ 田安 宗武
- 50 天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればた  
ゆたふ雲あり 楫取 魚彦
- 51 しきしまのやまと心を人とはば朝日ににほふ  
山ざくら花 本居 宣長
- 52 父母の旅なる我を思ふらむ待つらむさまのお  
もかげに見ゆ 小沢 芦庵
- 53 末つひに海となるべき山水もしばし木の葉の  
下ぐるなり 学 丹
- 54 みぞれ降り夜の更けゆけば有馬山出湯の室に  
人の音もせぬ 上田 秋成
- 55 思ひ入る道をばつくせ筑波山このもかのもと  
心うつさで 松平 定信
- 56 この里に手鞠つきつつ子どもらと遊ぶ春日は  
くれずともよし 良 寛
- 57 富士の根を木の間木の間にかへりみて松のか  
げ踏む浮島が原 香川 景樹
- 58 思ふこと早も成らなん今日の日のうれしき人  
に報いせんため 木下 幸文
- 59 故郷はふるさととはとて白雪のふりしくころに  
又なりにけり 兎山 紀成
- 60 吉野山雪も恨みも晴れにけり花の盛りの春に  
あひつつ 頼 梅颯
- 61 日々日々につもる心の塵あくた洗ひ流して我  
をたづねむ 二宮 尊徳
- 62 壁立てる巖とほりてあめつちに轟きわたる滝  
の音かな 加納 諸平
- 63 父に似て餓鬼とななりもそ大寺の金剛力士の  
すがたをなれ 鹿持 雅澄
- 64 文好む木の下かげにやすらひてともに語らむ  
武士の道 徳川 斉昭
- 65 武蔵の海さし出る月は天とぶやかりほるにや  
に残るかげかも 佐久間象山
- 66 時鳥なきもやせむと思ふまで青葉すゞしき川  
ぞひの宿(ニューヨーク郊外) 村垣 範正
- 67 大海をわが庭の井とくみあぐる初若水に春は  
来にけり 高島 祐啓
- 68 夜のほどの野分も知らずさきにけり窓にとり  
入れし朝顔の花 柳原 安子
- 69 わが顔を壁の穴よりうかがひつ鼠の友と思ふ  
なるべし 安藤 野雁
- 70 くれなるの大和錦もいろいろの糸まじへてぞ  
綾は折りける 野村望東尼
- 71 蟻と蟻うなづきあひて何かことありげに走る  
西へ東へ 橘 曙覧
- 72 行く人を田舎童の見るばかり立ちならびたる  
つくづくしかな 大隈 言道
- 73 立てそむる志だにたゆまずは竜のあぎとの玉  
もとるべし 野之口隆正
- 74 めせめせと炭売る翁声かれて袖に雪ちる年の  
くれかな 大田垣蓮月
- 75 あらたまの年のはじめは鶯のこゑもさらなる  
心地こそすれ 葛原美之一
- 76 わが袖の玉とひろひてつつまばやうちつけら  
れし石も瓦も 福田 行誠
- 77 われとわが思ひなせばめつ日をかけても見  
るは心ならずや 大西 祝
- 78 いづこにかしるしの糸はつけぬらむ年々来な  
くつばくらめかな 樋口 一葉
- 79 高殿の窓てふ窓をあけさせて四方の桜の盛り  
をぞ見る 明治 天皇
- 80 高麗百済新羅の国をわれ行けばわが行く方に  
秋の白雲 夏目 漱石
- 81 天地のわかゆる春の新草の緑の中に石の馬立  
つ 森 鷗外
- 82 身をいるるわづかばかりの家ながらすめば事  
たるかたつむり見よ 富岡 鉄斎
- 83 麦畑の萌黄びろうど芥子のはな五月の空にそ  
よ風の吹く 芥川龍之介
- 84 天地のわかちなかりし上つ代に立ちかへるな  
り天がけりつつ 長岡 外史
- 85 老柿のいささ五百枝のをち方の青海原は見れ  
ど飽かぬかも 坪内 逍遙
- 86 垢づきて仮名づけ多き教科書を貴きものと筐

にをさめぬ

西田幾太郎

87 山窓にタイプライターたたきをれば木つつき

やをる人訊くらむか

田中館愛橋

88 やよや子ら東鑑にのせてある道はこの道春の  
わか草

落合 直文

89 そのむかし少年にして師の大人のうしろより  
見し秋萩のはな

与謝野 寛

90 金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり  
夕日の岡に

与謝野晶子

91 霧ふかき南ドイツの朝の窓におぼろにうつれ  
ふるさとの山

久保猪之吉

92 昼ながらかすかに光る螢一つ孟宗のやぶをい  
できえたり

北原 白秋

93 ふるさとの山に向ひて言ふことなし故郷の山  
はありがたきかな

石川 啄木

94 瓶にさす藤の花ぶさ短かければたみの上に  
とどかざりけり

正岡 子規

95 床の上水越えたれば夜もすがら屋根のうらべ  
にこほろぎの鳴く

伊藤左千夫

96 山道に昨夜の雨の流したる松の落葉は片より  
にけり

島木 赤彦

97 しづかなる峠をのぼりこしとときに月の光は八  
谷をてらす

斎藤 茂吉

98 幾山川越えさりゆかばさびしさのはてなむ国  
ぞ今日も旅ゆく

若山 牧水

99 明治屋のクリスマス飾り灯ともりてきらびや  
かなり粉雪ふりいづ

木下 利玄

100 万の物みなひそまりて天地は一つの富士とな  
りにけるかな

石樽 千亦

○

〔解説〕 信綱が熱海西山に隠棲したのは戦のたけなわになつた昭和十九年の末であつた。この西山百人一首は、まだ西片町に在つた頃に、何度か孔版に書いて印刷した。これはその幼い児孫のための教書としてのいとなみであつた。それが多少修正されたものがこれである。信綱は三男五女、孫二十人に近く、曾孫も数人ある。一族繁栄を極めた。愛情はこまやかで、正月などは家族づれで集まれる御子たちの家族は壯観というほどだつた。その幼い人たちと親しく話しをする暇のないことから、歌を撰んで、これを与えることの試みをいく度もされた。竹柏園文庫の中には「四歳信綱の為に書きて与ふ」とある弘綱翁の書写になる「孝経」があつた。信綱は、世を終るまで、五瀬田芳柳の父君弘綱夫妻の油絵に朝夕の札を欠かなかつた。弘綱翁は父であり師であつた。その父性愛は、信綱にさながら伝えられて、幼い孫たちに歌を伝えたかつた。その具体化したものがこの「西山百人一首」である。それに孫戸妍、バチエラー八重子、杉山りつ子、湯川秀樹、牧野英一、鈴木虎雄、ウエーリー、尾崎行雄、チエンバレン、穂積陳重、林麿臣、渡辺重石丸、三条実美、新島襄、松浦武四郎、伊能忠敬、外作者不詳等三十四人を加えて少年向き読みものとして、「和訳ものがたり」を昭和三十一年十二月さらえ書房から出版した。あと書きの中に

「終りに私自身のことを少し書かせてもらいます。私の父は歌よみでしたので、私の小さい時に万葉集や山家集や、いろいろな歌から抄いた歌の暗誦をさせられました。何の事か意味がわかりませんが、歌というものの調べが入り易いので、かなりの数をおぼえました。（中略）さらえ書房の主人が熱海西山の私の書齋を訪ねられて、小学生や中学生のための歌の本をと頼まれました。私は大ぜいの孫や曾孫もありますが、みな離れて住んでいて、私の話をするにも出来ません。それで私の孫や曾孫にも読ませたい。また一般の家庭でも、わが国の古い歌や新しい歌を読んでもらおうと思つて引きうけることにしました。（下略）」

と書いてある。趣旨はこの通りである。百人一首に増補されたのは、おおむね専門歌人でない人、外国人も入っている。これは、歌が専門歌人のものでなく、広く詠まれるものだということを言外に示したものであると思われる。猶この後、「新撰百人一首」として皇太子に奉つた百人一首と、これと三十首ほど重なつていることは、その撰にあたってきびしい努力をしたものと思われる。私は、白秋の歌を載せたことは、一方的に白秋が確執をかまえてついに和することの出来なかつたにもかかわらず、あえて白秋の歌を採つたところに、温厚にして雅量ゆたかな信綱の人柄を今更追慕するのである。

猶、信綱には、「変体百人一首六七冊」の編撰がある。（上野図書館）

新撰百人一首

佐佐木 信綱撰  
昭和三年四月

- 1 八雲たつ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるそ  
の八重垣を 須佐之男命
- 2 千葉の葛野を見れば百千足る家庭も見ゆ国の  
秀も見ゆ 応神 天皇
- 3 石そそぐ垂水の上のさわらびの萌え出づる春  
になりけるかも 志貴 皇子
- 4 大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代  
し思ほゆ 柿本 入麿
- 5 竜の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に  
行きて来むため 大伴 旅人
- 6 しろがねも黄金も玉も何せむにまされる宝子  
子にしかめやも 山上 憶良
- 7 あをによし奈良の都はさく花の匂ふが如く今  
さかりなり 小野 老
- 8 ますらをのゆくとふ道ぞおほろかに思ひて行  
くなますらをの伴 聖武 天皇
- 9 大船に真楫しじぬきこの吾子を韓国へやる齋  
へ神たち 光明 皇后
- 10 旅人の宿りせむ野に霜ふらばわが子羽ぐくめ  
天の鶴群 遣唐使人母
- 11 御民われ生けるしるしあり天地の栄ゆる時に  
逢へらく思へば 海犬養岡麻呂
- 12 わかの浦にしほ満ちくれば瀉を無み芦辺をさ  
して鶴鳴きわたる 山部 赤人
- 13 不尽の嶺を高みかしこみ天雲もい行きはばか  
りたなびくものを 高橋虫麻呂

- 14 信濃路は今の墾道刈株に足ましましなむ履はけ  
わが夫 作者未詳東歌
- 15 下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝  
が心告れ 作者未詳東歌
- 16 丈夫が弓末振りおこし射つる矢を後見む人は  
語りつくかね 笠 金 村
- 17 ひさかたの天の香具山この夕べ霞たなびく春  
たつらしも 作者 未詳
- 18 秋風の吹きただよはす白雲は棚機つ女の天つ  
領巾かも 作者 未詳
- 19 かにかくに物は思はじ飛驒人の打つ墨縄のた  
だ一道に 作者 未詳
- 20 すめろぎの御代栄えむと東なるみちのく山に  
黄金花さく 大伴 家持
- 21 から国に行き足らはして帰り来む益良武雄に  
み酒たてまつる 多治比鷹主
- 22 わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水に  
もわれ無けなくに 安倍 女郎
- 23 波羅門のつくれる小田をはむ鳥まなぶた腫れ  
て幡幢に居り 高 宮 王
- 24 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも棒ごて  
行かむ 丈部黒当(防人)
- 25 わが妻も絵にかきとらむ暇もが旅ゆく吾は見  
つつしのぼむ 物部古麻呂(防人)
- 26 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出  
でし月かも 阿倍 仲麿
- 27 から衣きつつなれにしつましあればはるばる  
きぬるたびをしぞ思ふ 在原 業平
- 28 久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせ

- てしがな 菅原道実母
- 29 たらちねの親の守と相そふる心ばかりは関な  
とどめそ 小野千古の母
- 30 見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにし  
きなりける 素性 法師
- 31 久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のち  
るらむ 紀 友則
- 32 桜ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪ぞ  
ふりける 紀 貫之
- 33 筑波山端山しげ山しげけれどおもひ入るには  
さはらざりけり 源 重之
- 34 春の日のうららにさしてゆく舟は棹の雫も花  
ぞちりける 紫 式 部
- 35 もろこしも天の下にぞ有りと聞く照る日の本  
を忘れざらん 成尋阿闍梨母
- 36 吹く風を勿来の関と思へども道も狭にちる山  
桜かな 源 義家
- 37 み山木その梢とも見えざりし桜は花にあら  
はれにけり 源 頼政
- 38 吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の  
花をたづねむ 西行 法師
- 39 又や見む片野のみ野の桜狩はなの雪ちる春の  
あけぼの 藤原 俊成
- 40 山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた心  
吾あらめやも 源 実朝
- 41 おく山のほどろが下もふみわけて道ある世ぞ  
と人に知らせむ 後鳥羽天皇
- 42 春の夜の夢のうき橋とだえして嶺に別るる横  
雲のそら 藤原 定家

- 43 あげば又こゆべき山の峯なれや空ゆく月の末  
の白雲 藤原 家隆
- 44 山ざくら峰にも尾にも植多おかむ見ぬ世の春  
を人やしのぶと 藤原 公経
- 45 西の海よせくる波も心せよ神の守れるやまと  
島根ぞ 中臣 祐春
- 46 世の為に身をば惜しまぬ心とも荒ぶる神も照  
らし覽るらむ 龜山 天皇
- 47 時しあれば谷より出づる鶯に世を助くべき人  
を問はばや 後宇多天皇
- 48 ふりすさぶ朝けの雨のやみがたに青葉すずし  
き風の色かな 伏見 天皇
- 49 思ひかね入りにし山を立ち出でて迷ふうき世  
もただ君の為 藤原 師賢
- 50 ややま田の苗代水のひきひきに人の心のご  
る世ぞ憂き 北畠 親房
- 51 とりのねにおどろかさされて暁の寝ざめしづか  
に世を思ふかな 後村上天皇
- 52 わが庵は松原つづき海近く富士の高嶺を軒端  
にぞ見る 太田 道灌
- 53 月にちるみぎりの庭の初雪をながめしままに  
更くる夜半かな 豊臣 秀吉
- 54 西の海やその船よそひとくせなむ秋くれゆか  
ば波の寒きに 細川 幽齋
- 55 いかでわれ心の月をあらはしてやみにまどへ  
る人を照らさむ 中江 藤樹
- 56 くりかへし遠き昔をしづかなる窓の内外の書  
に見るかな 釈 元政
- 57 ゆく川の清き流れにおのづから心の水もかよ  
ひてぞすむ 徳川 光圀
- 58 初瀬のや里のうなるに道とへば霞める梅の立  
枝をぞさす 円珠庵契沖
- 59 熊にあらざ虎にもあらざ浅草におきふす我を  
誰か知るべき 戸田 茂睡
- 60 名あるものはやがて雲居にきこえあげよ聞き  
て我が代の楽しみにせむ 霊元 天皇
- 61 遁れても身はおく山の榊葉のさかく世をば  
祈らざらめや 荷田 春満
- 62 江の南うめも柳もはるばると千里にかすむう  
ぐひすの声 鳥栄 光榮
- 63 うらうらと長閑けき春の心より匂ひ出でたる  
山ざくら花 賀茂 真洵
- 64 学ばてもあるべくあらば生れながら聖にてま  
せどそれ猶し学ぶ 田安 宗武
- 65 何ゆゑにくだきし身ぞと人間はばそれと答へ  
むやまとだましひ 谷川 士清
- 66 世の中にうき人の子をはぐくまむ翹かしてよ  
天の鶴むら 河津 美樹
- 67 天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればた  
ゆたふ雲あり 楫取 魚彦
- 68 しきしまのやまと心を人とはば朝日に匂ふ山  
ざくら花 本居 宣長
- 69 大井川月と花とのおぼろ夜にひとり霞まぬ浪  
のおとかな 小沢 芦庵
- 70 戸隠の山にいほりて朝戸出の真袖に払ふ天の  
しら雲 荒木田久老
- 71 隅田川みの着てくだす筏師に霞むあしたの雨  
をこそ知れ 加藤 千蔭
- 72 庵原の清見が崎に朝晴れて富士は秋こそ見る  
べかりけれ 上田 秋成
- 73 浅間山神のいぶきの霧はれて雲井にたてる夕  
けぶりかな 村田 春海
- 74 玉鉾のみちのくこえて見まほしき蝦夷が千島  
の雪のあけぼの 藤田 東湖
- 75 ともの音きこえぬ国と梓弓ころゆるぶな益  
良雄の伴 本居 春庭
- 76 むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり  
遊ぶを見れば 僧 良寛
- 77 みのかひは何いのるべき朝な夕な民やすかれ  
と思ふばかりを 光格 天皇
- 78 四方八方ゆ刺しくる風に色かへで高嶺に立  
て 平田 篤胤
- 79 富士の根を木の間木の間にかへりみて松の影  
ふむ浮島が原 香川 景樹
- 80 日々日々につもる心のちりあくた洗ひながし  
てわれをたづねむ 二宮 尊徳
- 81 あしたづのつばさの上に玉しきて神やますら  
む瀧の水上 加納 諸平
- 82 余ゆ後うまれむ人は古言の吾か墾り道に草な  
生しそ 鹿持 雅澄
- 83 朝日かげ豊さかのぼる日の本のやまとの国の  
春のあけぼの 佐久良東雄
- 84 度会の宮路に立てる五百枝杉かげふむほどは  
神代なりけり 伴村 光平
- 85 武蔵の海さしいづる月は天とぶやかりほるに  
やに残る影かも 佐久間象山
- 86 わが胸のもゆるおもひにくらぶれば烟は薄し

桜島山

平野 国臣

87 大空は何か隔てむからやまと仰げば高し秋の

夜の月

斎藤 拙堂

88 天がした人といふ人こころあはせよるづの事に思ふどちなれ

孝明 天皇

89 高田のや加佐米の山のつむじ風ますらたけを

の笠吹き放つ

平賀 元義

90 夜のほどの野分も知らずさきにけり窓にとり

いれし朝がほの花

柳原 安子

91 くれなるの大和錦もいろいろの糸まじへてぞ綾は織りける

野村望東尼

92 梅の花思ふばかりの枝の樹を心にうゑて見る

ねざめかな

大隈 言道

93 蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに走る東

へ東へ

橘 曙覧

94 めせめせと炭売る翁声かれてそでに雪ちる年のくれがた

のくれがた

大田垣蓮月

95 時鳥なきもやせむと思ふまで青葉すずしき川

ぞひの宿

村垣 範正

96 天つ風こさ吹き払へしりべしの千代ふる雪に

照る日影見む

松浦武四郎

97 法の海よしいかばかり深くとも汲みほすまで

は汲まむとぞ思ふ

福田 行誠

98 わが命あらむ限はこの民を救はむと思ふこころたゆまし

ろたゆまし

勝 安房

99 われとわが思なせばめ、天つ日をかけても見

るは心ならずや

大西 祝

100 高殿の窓てふ窓をあけさせて四方の桜のさかりをぞ見る

りをぞ見る

明治 天皇

○

〔解説〕昭和三十六年十一月三日刊「新撰百人一首註」佐佐木信綱撰、熱海西山竹柏会発行B 6布装本を底本にした。別に、「新撰百人一首」折帖あり、刊年なし。巻頭に序あり。

昭和三十四年四月、天光四方に満ち、百花しきりに匂ふ。嘉辰なるかな。令月なるかな。

皇太子殿下、美智子殿下、御成婚の式を挙げさせ給ふ。国を挙りての慶祝の歓声、竹苑の春風に和して、熙々妍々たり、

ここに上代以降明治の御代までの歌のうちより、くさぐさのころすがたの作をえらびて、新撰百人一首と名づく。捧げまつりもて、をりをりに読み味ひまさむ料にそなふ。

願はくは山ごもりせる老歌人が微志を酌ませ給はむことを。佐佐木信綱八十八

とある。敬虔の至情をこめて、御成婚の皇太子同妃殿下にささげた由が記されている。

皇太妃美智子殿下の祖母君正田きぬ刀自は永年の信綱門人として、二冊の歌集を出している程、歌を愛好している方であり、皇太子の作歌の御樽導役の五島茂は、信綱門最長老石樽千亦

の子であり、美智子妃の作歌を拝見しているのは五島茂夫人美代子である。美代子夫人は、童女の頃からの竹柏園門人。そのような縁深いこともあって、心をこめて撰進したものである。

信綱の最晩年における短歌に対する考え方を知るのに好個な資料である。かねて皇室に對

する尊崇の精神のあらわれの一つであることも注意すべきである。

私は、それについても、皇太子御生誕の日の事を思うのである。昭和八年十二月廿三日、皇太子御生誕の事が報ぜられるや、国を挙つて慶祝の氣に満ちた。私は生徒をつれて明治神宮に参拝した。向うから斎藤茂吉が、こぼれるような満悦の笑みをたたえて、「やあ、めでたい、めでたいですなあ」と、近よって言葉をかけて行かれたのに感激した。その足で竹柏園に行く、信綱先生は、「よろこばしい事で、国のためにめでたいことで」と、声をかけられ、慶祝の歌を詠むために、例の小さい机を書院にもつて行って据え、書齋へ持って行って据え、又応接間に持って行って据え、言葉通り居ても立っても居られない喜びようであった。このような感激をもって慶祝の歌をよまれる先生に深くうたれた。私にも感激はなかつたが、信綱、茂吉の両先進の感激とはすでに、一つの逕庭のあることをしみじみと感じたことであつた。その後、戦火のはげしくなつた昭和十九年には、信綱が、後深草天皇宸翰御消息、後奈良天皇宸記天聰集、靈元天皇宸翰後水尾法皇八十御賀の記、耕雲千首等六種を宮中に献じたのも、宸翰の戦火に煙滅することをおもんばかつたのことであつた。最晩年、明治天皇御製集謹撰の委員の一人として執念のごとく、いやはての病床に在つても、信綱は、その努力を惜しまなかつたのであつた。

昭和百人一首

東京日日新聞社撰  
昭和十一年十二月

- 1 とし深き山のかそけさ。人をりてまれにも  
言ふ声聞えつつ 積 迢空
- 2 羽搏く翳がひろまつてゆき、くつきりと忘却  
を重ね、今朝の鳥を今朝は見送る 上田 穆
- 3 シヤラペンのそとは月夜になつたらしい。こ  
のまゝ日本に帰るのかと思ふ 石樽 茂
- 4 日向べに蕙を敷きて遊び居るわれの子これや  
女童ふたり 金子 不泣
- 5 秋深くなりけらしも高き木のひまより雨の  
降る空が見ゆ 岡 麓
- 6 昆布の葉の広葉にのりてゆらゆらにとゆれか  
くゆれゆるるゝ鷗 石樽 千亦
- 7 老松の幹あかあかと照るみれば日は西のべに  
落ちゆくらしも 岡山 巖
- 8 西空にたゝまる雲間赤くしてしづかなる海の  
水脈染まりたり 中河 幹子
- 9 粟畑に粟の穂をつむ女ゐて広き山畑こほろぎ  
のこゑ 高塩 背山
- 10 白雲は空にうかべり谷川の石皆石のおのづか  
らなる 佐佐本信綱
- 11 松島の春を来て吾が観るものは臨濟の寺の二  
株の梅 川 田順
- 12 逸速く丘に登り立ち逆光線に光る穂芒を弦が  
撮影すか 宇都野 研
- 13 海遠く明る妙なす流水のかがやくばかりこゑ  
呑むわれは 酒井 広治
- 14 青き野を水のながるゝ夢なりしが昼は疲れて  
おもひわがをり 安部 忠三
- 15 此窓よ千草の花を朝よひに日にけに見しが秋  
はふけたり 両角七美雄
- 16 秋風になびくすがたもそれぞれにちがひてや  
さし七草の花 茅野 雅
- 17 夕焼雲見よと見すれど吾兒未だ我顔のほかを  
見ること知らず 広田 楽
- 18 人間か馬か区別もつかぬこの生活わが両眼に  
烙きつけと思ふ 渡辺 順三
- 19 ひととせの命かぐはし差し香魚の 水恋ひ溯  
れ雅な差し香魚 由利 貞三
- 20 ひむがしに海ひらけたる国ゆきて青山に立つ  
虹あはれなり 結城哀草果
- 21 わが室のくもり硝子にうつる影ふゆは枯木の  
枝ばかりなり 和田 山蘭
- 22 旅に出でて東京をよしと思ひけり東京はわれ  
を生みしふるさと 金子 薫園
- 23 春日野に押し照る月の朗かに秋の夕となり  
けるかも 会津 八一
- 24 ねりまにし住みて巷の行き還りことは花の  
前後とも見つ 宗 不早
- 25 降りすぐるしぐれの雨はさを鹿の角をつたひ  
て滴りにけり 河野 慎吾
- 26 こゝにして穂高が嶽は天地の聖のごとし天そ  
そり立つ 藤沢 古実
- 27 山ふかき岩湯を浴むるうつし身は昨日のわれ  
の心にも似ず 久保田不二子
- 28 柿もぐと樹にのぼりたる日和なりはろぼろと  
して脊振見ゆ 中島 哀浪
- 29 葦山の城あところ桑の葉のおどろくばかり  
生ひぞしげれる 峰村 国一
- 30 むさし野の槻の高枝の指す空は今朝ほのけく  
も霞みたるかも 依田 秋圃
- 31 月のあかりわが影坊の濃くなりしこの山みち  
は小高内道 並木 秋人
- 32 大雪の朝けの道はほそくしてゆづりあひつゝ  
人はゆけるも 米田 雄郎
- 33 海の風ただち吹きとほす島の宿二階は涼し驟  
雨ちかづきぬ 中村 正爾
- 34 あけがらす鳴きつゝとべり雪しろき枯桑畑の  
茎のむらだち 浅野 梨郷
- 35 雲とその雲が投げたる影ありて高原のひろの  
静かなるかな 富田 碎花
- 36 電車自動車行く街角にややしばしぼうぜんと  
してゐたるに驚く 小泉 芟三
- 37 藤わか葉さゆらぐ下に時経てはつめたき水を  
のみたく思ふ 松村 英一
- 38 眼さむれば 松の下草を 刈る鎌の 音さや  
に聞ゆ 日和なるらし 下村 海南
- 39 夢さめて妻よびにけりさだかにもいらへせし  
声は妻の声なり 松田 常憲
- 40 あめなるや無限虚空にわたりあひ太陽光をさ  
へぎるものあり 橋本 徳寿
- 41 うつし世を 夢まぼろしとおもへども 百合  
あかくと咲きにけるかな 岡本かの子
- 42 しづかなる峠をのぼり来しときに月の光は八

谷を照らす

斎藤 茂吉

43 赤砂の浅間のやまの山ひだに光るすぢあり陽

にふるへつゝ

片山 広子

44 著飾りて街に遊べる子供等の晴々しさを妻も

出て見よ

大悟法利雄

45 すゞかけのちぎれ飛ぶ音きゝとめていまはた

耐へぬ月の光を

馬場 静浪

46 白鷺の舞ひ立つ見れば葦原の中ゆく水脉の明

るかりけり

菊地 知勇

47 水煙の天女のすがたありくゝと澄みきはまり

し秋のおほぞら

安江 不空

48 午近き照りのきびしさ香具山は遠目にし見て

道ひきかへす

森山 汀川

49 萩むらの黄金のもみぢ四方にしたら花よりも

なほたちまさり見ゆ

若山喜志子

50 旅客機の窓をひらいて、青空を吹き入れる。

遙かな地上のさくらの音楽

前田 夕暮

51 見放くれば広くなりつつ流るれど利根はいま

だも山なかの川

半田 良平

52 ふみよみてこゝろ澄みゆくときのまをこの世

の幸とおもひ知りにし

大熊 信行

53 妻に子に年のはじめの新しき言も持たねば相

寄り食ふ

加藤 順三

54 鶴を放ちて梅の林にあそぶとぞうたひし人の

恋しかりけり

岡野直七郎

55 しののめの鐘のひびきにおのづから日はさめ

にけり吾子はあらぬに

本居 亮一

56 大熊星や傾きてあきらけしく度いでてあ

ふぐ暁の空

北見志保子

57 あかるい世界ばかりを尋ねて行つたらこんな

にもあかるい世界になつた

西村 陽吉

58 僧一人ひる寝してをり方丈のひさしの上の深

き青空

太田 水穂

59 いなづまの光の中にさくら花わづかにうごく

白さ見にけり

四賀 光子

60 天に凝る秋の気なれやひとところむらがる雲

は山をつつめり

生田 蝶介

61 くれなるの青木葉の実は淡雪のふりに降れど

もあざやかに見ゆ

香取 秀真

62 吾子よ見よ護謨の葉かげに青くそよぐ芋の葉

見れば故郷の如し

築地 藤子

63 山の端の空は真青に澄み切つて月に近づくも

の一つなし

尾上 柴舟

64 あまのがはさやかに見えて風さむし玻璃戸ひ

きつつ鳥が音を聴く

相馬 御風

65 三角形のくろい旗は夜を象徴する。リラの花

のにはふ華ぞのでは、資本主義もまた仮装す

るのである。

石原 純

66 あなたの息づきが風となり波をおこし船を追

ひ追ひこゝにきこえる

さのかづひこ

67 千曲川の河原の凸凹に雪はだらなる月夜な

りけり

四海多実三

68 さち子さち子その名を呼びて不覚なり。涙ぐ

ましきは心弱きにあらず

坂口 保

69 大君に召さるる今日を天地のただに清けき若

葉の光

吉植 庄亮

70 小鳥はまことに小さしこの頃の冬枯山にまれ

に来て啼く

加藤 東籬

71 この夕べたとへしもなくしづかなり日はあき

らかに月を照らしぬ

北原 白秋

72 立消ゆる瀬波のまにま吹きおこる風はつめた

く身にしみにけり

土田 耕平

73 立ちならぶみ仏の像いまみればみなくなるしみ

に耐へしみ姿

今井 邦子

74 天地に己れ寂しと思ふとき浅間は燃ゆる陽の

入りぎはを

杉浦 翠子

75 川霧のなづさふ梢の夕鳥のけはひひそまりて

木しづくの音

水町 京子

76 日をいく日越え来し海かしづむ日はたての

空のあかくしづけさ

村野 次郎

77 鳥のこゑ群がりあがる繁み見えて閉せし門の

なかは谷らし

竹尾 忠吉

78 恋といふ身に沁むことを正月の七日ばかりは

思はずもがな

与謝野晶子

79 今のさき我をしみくゝ見まししが別れのきは

の心なりしか

大橋 松平

80 葉代払はぬ人の家ながら杜若の花はよく咲き

にけり

対馬 完治

81 白き記憶黒き記憶のずつと奥に遠い故郷の小

川流るゝ

小花 貞三

82 鞍馬山谷間の空を飛びむかふ鷹吹き据うる杉

あらしかも

小田 観螢

83 さしいづる光や遠く雲こもる山の斑雪をあき

らかに見し

高田 浪吉

84 ますらをのかなしきいのちつみ重ねつみ重ね

まもる大和島根を

三井 甲之

85 降りくれし元日の雪はもの音のとなりも遠く

つもりたるらし

白井 大翼

意ほゝゑましもよ

花田比露思

86 とうへへの友とたより来て三十年 五十にな

100 大阿蘇の山の煙はおもしろし空にのぼりて夏

れる良平に対す

植松 寿樹

雲となる

吉井 勇

87 仰ぎみて夕陽に映ゆる百日紅愛めて出にけり  
霽れしばかりを 荒木 暢夫

〔解説〕東京日々新聞紙上に発表された歌壇現

88 今日も朝からこの暑さだ。けれども暑さのこ  
となんか いったり居られようか。仕事は待  
つ。 矢代 東村

役歌人の、自撰一首をもとめて、これを五首乃

89 山に入る日は故郷に似たれども雪ちかくして  
まうらがなしも 土屋 文明

至七首宛、前後十七回にわたって掲載し、昭和

90 土のうへに提灯をおきて聞きにけり谷に下れ  
る仏法僧鳥の声 山下 陸奥

十一年十二月十六日に、第十七回で百首を完了

91 溪川の岩の際激ちゆく水のしぶきは岩を濡ら  
す常世に 中沢 庭柯

によった。各自撰であることは、97の土岐善麿

92 春もやや日光さびしくなりにけり沢わさび田  
の逃水のおと 穂積 忠

の歌に、(釈迢空代選)とあるので知られる。

93 戦ひは人間の事か大明湖の青葦叢になけるよ  
しきり 齋藤 瀏

詞書、題詞の長いものの省略したものだけを

94 岬近く沈める鐘のひびきをば伝へて浪の荒磯  
をうつ 白仁 秋津

ここに註記する。3スコットランド周遊バス車

95 東京を遠しと思ふ心持ち火鉢におこす堅炭の  
火を 窪田 空穂

中吟(石樽茂)、12三男弦と秋の野を歩む(宇

96 大根を洗ひさらして乳牛を洗へば濁る春の川  
かな 平野 万里

都野研)、18東北凶作地の歌、連作中の一(渡

97 なかぞらの風にひた対ふ一点の紙鳶の張りこ  
そ手につたひ来れ 土岐 善麿

辺順三)、19差し香魚は春の頃、海より河川を

98 秋の旅出でたちて来ぬ老いぬれどこれ限りと  
も思はざりけり 小金井喜美子

湖上する若香魚をいふ(由利貞三)、40日蝕の

99 予言ふ莫からむを欲すとつばやきけむ仲尼が

日、日向国都井岬にて(橋本徳寿)、55愛児を

失ひし頃(本居亮一)、62ボルネオにて(築地藤子)、76太平洋上にて(村野次郎)。  
昭和十一年といえ、今から三十五年前にな  
る。美濃部達吉博士の天皇機関説が排撃され、  
国体明徴論が号ばれた頃で、この年二二六事件  
がおこり、世論漸く右に傾きつつあったのであ  
る。翌十二年にはメーデーが禁止され、国民総  
動員要綱が決定されたりした頃である。歌壇で  
は、少し前に改造社版の「短歌講座」十二巻が  
完了し、その月報であつた「短歌研究」が独立  
した月刊雑誌となり、この百人一首の79大橋松  
平が編集にあたり、改造社から発行され、柳田  
新太郎は歌壇ジアナリストとして、短歌新聞社  
を主宰して活躍した。更に、改造社から、「新  
万葉集」十二巻が刊行された。これは、歌壇の  
総力をあげて明治以後の歌人の新旧にかかわら  
ず広く募集し、佐佐木信綱、与謝野寛、斎藤茂  
吉、北原白秋、窪田空穂以下十数氏の共選で数  
十万首に上るものから撰集される大業が行われ  
た。いわば世紀の事業ということが出来る。と  
にもかかわらず歌壇にとっては最も盛んな時代で  
あつたといえる時代の歌壇百人一首である。然  
もこの時代の意識のもとに各自撰による歌であ  
ることも注意されてよい。  
釈迢空は冒頭に出ており、土岐善麿の歌を代  
選したりして、この百人一首に関係が深いよう  
である。或は人選についても相談にあつた  
かも知れない。上田穆は吉祥寺に住んで本の貸  
しがある。石樽茂は今の本名五島茂。石樽千亦  
はその父、この歌半切に書いてもらったが、今  
持っていない。岡山巖はこの頃元氣だったが、  
戦後急に老い込んで会では居睡りをよくしてい  
た故人。中河幹子は最近の和歌文学会で講演な  
どして元氣。佐佐木信綱は恩師、川田順は同門  
の先輩、藤沢古夷、中村正爾、大橋松平、は文  
学報国会の短歌部会の幹事でよく飲んだりした  
がみな故人である。歌はせっぱつまつたもので  
はない。時代は歌人の心にまでまだまだしみと  
おっていない。わざわざ時世を逃避したと見ら  
れるほどに。

愛国百人一首

川田順 撰  
昭和五・二

- 1 韓国の城の上に立ちて大葉子は領巾振らすも  
日本へ向きて 大葉子
- 2 大君は神にしませば天雲の雷の上に盧せるか  
も 柿本人麻呂
- 3 青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今さ  
かりなり 小野 老
- 4 もののふの臣の壮士は大君の任のまにまに聞  
くといふものぞ 笠 金 村
- 5 八隅知わが大君の御食国は大和もここに同じ  
とぞ思ふ 大伴 旅人
- 6 千万の軍なりとも言挙げせずとりて来ぬべき  
をのことぞ思ふ 高橋虫麻呂
- 7 み民われ生けるしあり天地の榮ゆる時に  
あへらく思へば 海犬養岡麻呂
- 8 大君のみことかしこみ大船の行きのまにまに  
宿りするかも 雪 宅麻呂
- 9 ふる雪の白髪までに大君に仕へまつればたふ  
とくもあるか 橘 諸 兄
- 10 敷島の大和の国にあきらけき名に負ふ伴の緒  
こころつとめよ 大伴 家持
- 11 大君のみことかしこみ磯に触り海原わたる父  
母をおきて 文部造人麻呂
- 12 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍にわれは来  
にしを 大舎人部干文
- 13 今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と  
出で立つわれは 今奉部与曾布
- 14 草深き霞の谷に影かくし照る日の暮れし今日  
にやはあらぬ 文屋 康秀
- 15 忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏みわて君  
見むとは 在原 業平
- 16 海ならずたたへる水の底までも清きところは  
月ぞ照らさむ 菅原 道真
- 17 祖父父うまご輔親三代までに戴きまつるすべ  
らおほん神 大中臣輔親
- 18 君が代はつきじとぞ思ふ神風や御裳濯河の澄  
まむかぎりは 源 経 信
- 19 何事につけてか君を祈らまし八百万代もかぎ  
りありけり 高倉一宮紀伊
- 20 朝ごとにみぎはの氷ふみわけて君に仕ふる道  
ぞかしこき 源 通 親
- 21 我が国は天照る神のすゑなれば日の本としも  
言ふにぞありける 藤原 良経
- 22 山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心吾  
があらめやも 源 実 朝
- 23 勅なれば身をば寄せてきものふの八十字治  
川の瀬には立たねど 鏡 月 房
- 24 何か残る君が恵の絶えしより谷の古木の朽ち  
も果てなで 藤原 家隆
- 25 勅をして祈るしるしの神風によせ来る浪ぞか  
つ砕ける 大納言経任
- 26 西の海よせ来る浪もこころせよ神のまもれる  
大和島根ぞ 中臣 祐春
- 27 末の世の末の末まで我が国はよろづの国にす  
ぐれたる国 宏覚 禅師
- 28 いにしへもかかる例をきく川のおなじ流れに  
身をや沈めむ 藤原 俊基
- 29 帰るべき道しなければこれやこの行くをかぎ  
りの逢坂の関 源 具 行
- 30 思ひかね入りにし山をたち出でて迷ふ憂世も  
ただ君のため 花山院師賢
- 31 もののふの上矢の鏑ひとすぢにおもふ心は神  
ぞ知るらむ 菊地 武時
- 32 植ゑおかば苔の下にもみ吉野のみゆきの跡を  
花や残さむ 粟田 久盛
- 33 かへらじとかねて思へば梓弓なき数にいる名  
をぞとどむる 楠木 正行
- 34 かた糸の乱れたる世を手にかけて苦しきもの  
は吾が身なりけり 北畠 親房
- 35 みちのくの安達の真弓とりそめしその世に継  
がぬ名を嘆きつつ 北畠 守親
- 36 君がため吾が執り来つる梓弓もとの都にかへ  
さざらめや 四条 隆俊
- 37 思ひきや山路のみ雪ふみわけてなきあとまで  
も仕ふべしとは 藤原 光任
- 38 我が君の夢には見えよ今もなほかしこき人の  
野辺に遣らば 藤原 師兼
- 39 神路山いづる月日や君が代をよるひる守る光  
なるらむ 足利 成直
- 40 引きそめし心のままに梓弓おおもひかへさで  
年も経にけり 源 頼武
- 41 いかにして伊勢の浜荻ふく風の治まりにきと  
四方に知らせむ 北畠 顕能
- 42 君すめば峯にも尾にも家居してみ山ながらの  
都なりけり 二条 為忠

- 43 神の代の三種のたから伝へます我がすべらぎ  
ぞ道も正しき 花山院長親
- 44 二つなきことわり知らば武士の仕ふる道はう  
らみなからむ 太田 道灌
- 45 命より名こそ惜しけれ武士の道にかふべき道  
しなれば 森迫 親正
- 46 君なくば憂身の命なにかせむ残りて甲斐のあ  
る世なりとも 三宅 治忠
- 47 ちぎりあれや涼しき道にともなひて後の世ま  
でも仕へ仕へむ 中村文荷齋
- 48 唐土もかくやは涼し西の海の浪路吹きくる風  
に問はばや 豊臣 秀吉
- 49 日の本の光を見せてはるかなる唐土までも春  
や立つらむ 細川 幽齋
- 50 あぢきなや唐土までもおくれじと思ひしこと  
は昔なりけり 新納 忠元
- 51 異国もしたがひにけりかかる世を待ちてや神  
の誓ひあらはす 是齋 重鑑
- 52 あらたまの年にさぎだち咲く花は世に名を残  
すさきがけと知れ 板倉 重昌
- 53 あら樂し思ひは晴るる身は捨つるうき世の月  
にかかる雲なし 大石 良雄
- 54 わたつみのその生みの子の八十つづぎ大和の  
国の君ぞ変らぬ 僧 契沖
- 55 踏みわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るの  
み人の道かは 荷田 春満
- 56 もろこしの人に見せばやみ吉野の吉野の山の  
山桜花 賀茂 真洸
- 57 さし出づるこの日の本の光より高麗もろこし
- も春を知るらむ 本居 宣長
- 58 思ふこと一つも神に務めをへず今日やまかる  
かあたり此の世を 平田 篤胤
- 59 君と臣品さだまりて動かざる神国といふこと  
を先づ知れ 橘 曙覧
- 60 仇と見るえみしが伴を末遂に貢の船となさで  
やまめや 大國 隆正
- 61 青柳の絲のみだれを春風のゆたかなる世に忘  
れずもがな 白河 樂翁
- 62 梓弓八島のほかもおしなべて我が君が世の道  
仰ぐらし 徳川 治紀
- 63 敵あらばいでもの見せむ武士の弥生なかばの  
眠りざましに 水戸 烈公
- 64 伝へては我が日の本のつはものの法の花咲け  
五百年の後 林 子平
- 65 われを我としろしめすかやすべらぎの玉の御  
声のかかるうれしき 高山彦九郎
- 66 比叡の山みおろす方ぞ哀れなる今日九重の数  
し足らねば 蒲生 君平
- 67 しきしまの大和心を人間はば蒙古のつかひ斬  
りし時宗 村田 清風
- 68 八千矛の一すぢごとにここだくの夷の首つら  
ぬきてまし 藤田 東湖
- 69 君が代をおもふ心の一すぢに吾が身ありとは  
思はざりけり 梅田 雲浜
- 70 吾が罪は君が代おもふまごころの深からざり  
ししるしなりけり 頼三樹三郎
- 71 かくすればかくなるものと知りながらやむに  
やまれぬ大和魂 吉田 松陰
- 72 雄々しくも君に仕ふる武士の母てふものはあ  
はれなりけり 有村蓮寿尼
- 73 飯食ぶと箸をとるにも大君の大きめぐみと涙  
し流る 佐久良東雄
- 74 天皇に身は捧げむと思へども世に甲斐なきは  
女なりけり 児島強介母
- 75 隼人の薩摩の子らの劍太刀抜くと見るより楯  
はくだくる 是枝柳右衛門
- 76 大君の御旗の下に死してこそ人と生まれし甲  
斐はありけれ 田中河内介
- 77 君がためいのち死にぎと世の人に語り継ぎて  
よ峯の松風 松本謙三郎
- 78 君が代はいはほと共に動かかねばくだけてかへ  
れ沖つ白浪 伴林 光平
- 79 吾が胸の燃ゆるおもひにくらぶれば煙はうす  
し桜島山 平野 国臣
- 80 梓弓真弓槻弓さはにあれどこの筒弓に如く弓  
あらめや 佐久間象山
- 81 執り佩ける太刀の光はもののふの常に見れど  
もいやめづらしも 久坂 玄瑞
- 82 一すぢに思ひいる矢の誠こそ子にも孫にも貫  
きにけれ 真木 保臣
- 83 年月は改まれども世の中のあらたまらぬぞ悲  
しかりける 武市半平太
- 84 誰が身にもありとは知らでまどふめり神のか  
たみの大和魂 野村望東尼
- 85 露をだにいとふ大和の女郎花ふるあめりかに  
袖はぬらさじ 遊君 桜木
- 86 ふるばかり亜米利加船の寄せば寄せ三笠の山

の神いますなり

岩倉 具視

87 大君はいかにいますと仰ぎみれば高天の原ぞ

霞こめたる

三条 実美

88 樞原のひじりの御代のいにしへの跡を覓めても来たる春かな

佐佐木弘綱

89 えみしらが息吹に曇る月みればみやこの秋の

心地こそせね

玉松 操

90 ますらをの涙を袖にしぼりつつ迷ふ心はただ

君のため

江藤 新平

91 上衣はさもあらばあれ敷島のやまと錦は心に

ぞ著る

西郷 隆盛

92 国守る大臣は知るや知らざらむ民のかまどの

ほそき煙を

勝 安芳

93 うとかりし老の耳にもこのごろの軍がたりは

聴きももらさず

海上 胤平

94 都鳥みやこのことは見て知らむわれには告げ

よ国の行末

与謝野 寛

95 思ひきや日の入る国のはてに來て昇る朝日の

景を見むとは

福本 日南

96 名のために佩けるにはあらじ我が太刀はただ

大君の勅のまにまに

八田 岩馬

97 名も初瀬いくさもこれが初めなりおくれは取

らじ国のみために

梶村 文夫

98 しのめの空くれなるに昇る日は八咫の鏡の

光なりけり

庄司 祐亮

99 御涙をのみて宣らししみことのり貫きとほせ

いのち死ぬとも

高崎 正風

100 うつし世を神去りましし大君のみあとしたひ  
て我は行くなり

乃木 希典

○

〔解説〕川田順が、雑誌キングの求めに応じ昭和一五年一月月号から、翌一六年六月月号にわたり掲載した「愛国百人一首」とその註釈と批評を、昭和十六年七月講談社から出版した。これを底本にした。その緒言に

新羅の城砦に立って日本に向ひ領巾を振つた烈婦から、明治の大君の御あとを慕って自刃した軍神の辞世まで、忠君愛国の短歌一首を撰び、仮りに「愛国百人一首」と名付く。日本精神の言葉の花は、その単なる歴史的事件と相俟って、一卷の絵巻の如く繰り展げられるであらう。但し、絢爛優美なる絵巻ではなく、血湧き肉躍る場面を屢々あらはす。万葉歌人群の莊重なる君国頌歌に始まり、やがて承久役・蒙古来・吉野朝の義戦・豊公征韓役・皇典学者群の日本意識・幕末志士の尊攘・日清戦争・日露戦役と展開して終る。日本歴史の一冊を座右に置きながら、此の百人一首を読んでいただきたい。

と書いている。川田順は、又、

現下の国情において、歌人も街頭に立たねばならぬ、私も及ばずながら、支那事変勃発と同時に、街頭に出ることを覚悟した。「吉野朝の悲歌」や「幕末愛国歌」や「国初聖蹟歌」など公にしたのも単に文学としての意味のみでなく、現下の国民精神にいささかでも寄与せねばならぬと考へた故であった。

と巻頭に述べている。この頃の川田順は、油に

のり切って、歌業に研究に八面六臂の業跡をあげていた。やがて歌集「鷲」が成り、更に戦国時代和歌の研究において学界未踏の土に鏃を入れた。何れにしても、昭和十一年以来の国民精神の潮流は急角度に戦時色にぬりかえられて来たのであった。

この翌年には、文学報国会の「愛国百人一首」が発表された。川田順もその撰者に加わったが、その百人一首と人物のかさなるもの、柿本人麿・小野老・笠金村・大伴旅人・高橋虫麿・海犬養岡麿・雪宅麿・橘諸兄・大伴家持・丈部人麻呂・大舍人部千文・今奉部与曾布・菅原道真・大中臣輔親・源経信・藤原良経・源実朝・中臣祐春・宏覚禪師・花山院師賢・菊池武時・楠木正行・北畠親房・森迫親正・新納忠元・荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤・橘曙覧・水戸烈公・高山彦九郎・林子平・藤田東湖・梅田雲浜・吉田松陰・田中河内介・松本奎堂・伴林光平・平野国臣・佐久間象山・久坂玄瑞・真木和泉・野村望東尼以上四十四人が共通し、歌は二十六首ほど重なる。この百人一首は明治以後の人を加えているので、明治以前八十五人中四十四人が共通している。約半数が、文学報国会編の百人一首に一致し、百首の四分の一強の二十六首が共通している。時代の好尚と、川田順の鑑賞批評の目が練達であることがいわれよう。選歌は批評の結論であり、弁解のない解答なのである。「容易の仕事ではなかった」と順は後記に述懐している。

愛国百人一首

日本文学報国会選  
昭和二十二年二月二〇日発表

- 1 大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも 柿本人麻呂
- 2 大宮の内まで聞ゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声 長 奥麻呂
- 3 やすみししわが大君の食国は大和も此処も同じとぞ念ふ 大伴 旅人
- 4 千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき男とぞ思ふ 高橋虫麻呂
- 5 をのこやも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てずして 山上 憶良
- 6 ますらをの弓末振り起し射つる矢を後見む人は語りつぐがね 笠 金村
- 7 あしひきの山にも野にもみ獵人さつ矢手挟みみだれたり見ゆ 山部 赤人
- 8 旅人の宿せむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群 遣唐使使人母
- 9 わが背子はものな思ほし事しあらば火にも水にも吾なけく 安倍 女郎
- 10 み民吾生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば 海犬養岡麻呂
- 11 大君の命かしこみ大船の行きのまにまに宿りするかも 雪 宅麻呂
- 12 あをによし奈良の京は咲く花のほふがごとく今さかりなり 小野 老
- 13 降る雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか 橘 諸兄

14 天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか 紀 清人

15 新しき年のはじめに豊の年しるとならし雪のふれるは 葛井 諸會

16 唐国に往き足らはして帰り来むますら武雄に御酒たてまつる 多治比鷹主

17 すめろぎの御代榮えむと東なるみちのく山にくがね花咲く 大伴 家持

18 大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母をおきて 丈部人麻呂

19 真木柱ほめて造れる殿のごとくいませ母刀自面変りせず 坂田部麻呂

20 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は来にしを 大舍人部千文

21 今日よりはかへりみなくて大君のしこの御盾と出で立つ吾は 今奉部与曾布

22 天地の神を祈りてさつ矢ぬき筑紫の島をさして行く吾は 大田部荒耳

23 ちはやぶる神の御坂に幣奉り齋ふのちは母父がため 神人部子忍男

24 翁とてわびやは居らむ草も木も榮ゆる時に出でて舞ひてむ 尾張 浜主

25 海ならずたたへる水の底までも清き心は月ぞ照らさむ 菅原 道真

26 山のごと坂田の稲を抜き積みて君が千歳の初穂にぞ眷く 大中臣輔親

27 もろこしも天の下にぞ有りと聞く照る日の本を忘れざらなむ 成尋阿闍梨母

28 君が代はつきじとぞ思ふ神風やみもすそ川のすまむ限は 源 経信

28 君が代は松の上葉におく露のつもりて四方の海となるまで 源 俊頼

29 君が代にあへるは誰も嬉しきを花は色にも出でにけるかな 藤原 範兼

31 み山木その梢とも見えざりし桜は花にあらはれにけり 源 頼政

32 宮柱したつ岩根にしき立ててつゆも曇らぬ日の御影かな 西行 法師

33 君が代は千代ともささじ天の戸や出づる月日のかぎりなれば 藤原 俊成

34 昔たれかかかる桜の花を植えて吉野を春の山となしけむ 藤原 良経

35 山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも 源 実朝

36 曇りなきみどりの空を仰ぎても君が八千代をまづ祈るかな 藤原 定家

37 末の世の末の末まで我が国はよろづの国にすぐれたる国 宏覚 禪師

38 西の海よせくる波も心せよ神の守れるやまと島根ぞ 中臣 祐春

39 勅として祈るしるしの神風に寄せくる娘はかつ砕けつつ 藤原 為氏

40 命をばかろきになして武士の道よりおもき道あらめやは 源 致雄

41 限なき恵を四方にしき島の大和島根は今さかゆなり 藤原 為定

42 思ひかね入りにし山を立ち出でて迷ふうき世もただ君の為 藤原 師賢

43 君をいのる道をいそげば神垣にはや時つげて

は我ひとり見き

林 子平

72 君がため花と散りにしますらをに見せばやと

鶏も鳴くなり

津守 国貴

58 我を我としろしめすかやすへらぎの玉のみ声

思ふ御代の春かな 加納 諸平

44 ものふの上矢のかぶら一筋に思ふ心は神ぞ

のかかる嬉しき

高山彦九郎

73 大君の宮敷きましし檀原のうねびの山の古お

知るらむ

菊池 武時

59 あし原やこの国ぶりの言の葉に栄ゆる御代の

もほゆ 鹿持 雅澄

45 かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名

声ぞ聞ゆる

小沢 蘆庵

74 大君のためには何か惜しからむ薩摩のせとに

をぞとどむる

楠木 正行

60 しきしまのやまと心を人とはば朝日にはほふ

身は沈むとも 僧 月照

46 鶏の音になほぞおどろく仕ふとて心のたゆむ

山ざくら花

本居 宣長

75 大君の御贄のまけと魚すらも神代よりこそ仕

ひまはなけれど

北畠 親房

61 初春の初日かがよふ神国の神のみかげをあふ

へきにけれ 石川 依平

47 いのちより名こそ惜しけれ武士の道にかふべ

げもろもろ

荒木田久老

76 君が代を思ふ心のひとすぢに吾が身ありとは

き道しなけれど

森迫 親正

62 八束穂の瑞穂の上に千五百秋国の秀見せて照

おもはざりけり 梅田 雲浜

48 あふぎ来てもろこし人も住みつくやげに日の

れる月かも

橘 千蔭

77 身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留めおか

本の光なるらむ

三条西実隆

63 香具山の尾上に立ちて見渡せば大和国原早苗

まし日本魂 吉田 松陰

49 あぢきなやもろこしまでもおくれじと思ひし

ことは昔なりけり

64 かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民と

切る太刀 有村次左衛門

50 富士の嶺に登りて見れば天地はまだいくほど

あるが楽しき

栗田 土満

79 鹿島なるふつの霊の御剣をこころに磨ぎて行

もわかれざりけり

下河辺長流

65 遠つ祖の身によろひたる緋緘の面影浮かぶ木

くはこの旅 高橋多一郎

51 行く川の清き流れにおのづから心の水もかひ

木のみみぢ葉

蒲生 君平

80 天皇に仕へまつれと我を生みし我がたらちね

てぞすむ

徳川 光圀

66 大日本神代ゆかけて伝へつる雄雄しき道ぞた

ぞ尊かりける 佐久良東雄

52 ふみわけよ日本にはあらぬ唐鳥の跡をみるの

ゆみあらすな

賀茂 季鷹

81 天ざかる蝦夷をわが住む家として竝ぶ千鳥の

み人の道かは

荷田 春満

67 青海原潮の八百重の八十国につぎてひろめよ

まもりともがな 徳川 齊昭

53 大御田の水泡も泥もかきたれてとるや早苗は

此の正道を

平田 篤胤

82 朝廷辺に死ぬべきいのちながらへて帰る旅路

我が君の為

賀茂 真淵

68 一方に靡きそろひて花すすき風吹く時ぞみだ

の憤ろしも 有馬 新七

54 ものふの兜に立つる鍬形のながめ柏は見れ

れざりける

香川 景樹

83 大君の御旗の下に死してこそ人と生れし甲斐

どあかずけり

田安 宗武

69 安見ししわが大君のしきませる御国ゆたかに

はありけれ 田中河内介

55 すめ神の天降りましける日向なる高千穂の嶽

春は来にけり

大倉 鷲夫

84 しづたまき数ならぬ身も時を得て天皇がみ為

やまづ霞むらむ

楫取 魚彦

70 かきくらすあめりか人に天つ日のかがかやく邦

に死なむとぞ思ふ 児島 草臣

56 天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の

のてぶり見せばや

藤田 東湖

85 君がため命死にきと世の人に語り継ぎてよ峰

雪は残れり

橋 枝直

71 わが国はいともたふとし天地の神の祭をまつ

の松風 松本 奎堂

57 千代ふりし書もしるさず海の国のまもりの道

りごとにて

足代 弘訓

86 天皇の御楯となりて死なむ身の心は常に楽し

くありけり

鈴木 重胤

87 曇りなき月を見るにも思ふかな明日はかばね

の上に照るやと

吉村虎太郎

88 君が代はいはほと共に動かねば砕けてかへれ

沖つしら波

伴林 光平

89 ますらをが思ひこめにし一筋は七生かふとも

何たわむべき

渋谷伊与作

90 みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ舟より

遠くものをこそ思へ

佐久間象山

91 執り佩ける太刀の光はものふの常に見れど

もいやめづらしき

久坂 玄瑞

92 大君の御楯となりて捨つる身と思へば軽き我

が命かな

津田愛之助

93 青雲のむかふす極すめろぎの御稜威かがやく

御代になしてむ

平野 国臣

94 大山の峰の岩根に埋めにけりわが年月の日本

だましひ

真木 和泉

95 片敷きて寝ぬる鎧の袖の上に思ひぞつもる越

の白雪

武田耕雲斎

96 武夫のたけきかがみと天の原あふぎ尊め丈夫

のとも

平賀 元義

97 後れても後れてもまた君たちに誓ひしことを

われ忘れめや

高杉 晋作

98 武夫のやまと心をより合はせただひとすぢの

大綱にせよ

野村望東尼

99 男山今日の行幸の畏きも命あればぞをろがみ

にける

大隈 言道

100 春にあけてまづ見る書も天地のはじめの時と

読み出づるかな

橘 曙覧

〔解説〕定本愛国百人一首解説（日本文学報国会編。昭和十八年三月廿五日毎日新聞社刊行）の凡例によれば

愛国百人一首は、日本文学報国会が、情報局・大政翼賛会の後援、毎日新聞社の協力のもとに発起せるものにして、まづ選定委員に次の十一氏、佐佐木信綱・斎藤茂吉・太田水穂・尾上柴舟・窪田空穂・折口信夫・吉植庄亮・川田順・斎藤瀾・土屋文明・松村英一。選定顧問に次の十五氏、情報局川面第五部長・同井上第五部第三課長・翼賛会相川実践局長・同高橋文化部長・文部省生悦住社会教育局長・同大岡国語局長・陸軍省谷萩報道部長・海軍省平出報道部課長・放送協会関事業局長・徳富蘇峯・下村海南・辻善之助博士・平泉澄博士・久松潜一博士・井野辺茂雄博士を委嘱し、毎日新聞社が全国より募集せる多数の推薦歌に更に、日本文学報国会短歌部門幹事、及び選定委員の数氏より呈出推薦歌を、前後七回にわたりて慎重厳選せるものなり。愛国といへる語を広義に解釈して国土礼讃、人倫、季節等の歌をも加ふることとし、時代は万葉集より明治元年以前に物故せる人に限ることとせり。本書緒論は窪田空穂。解説は、柿本人麿より神人部子忍男までは土屋文明。尾張浜主より新納忠元までは尾上柴舟。賀茂真洩・楳取魚彦・高山彦九郎・香川景樹・藤田東湖・石

川依平・佐久良東雄・鈴木重胤・伴林光平・久坂玄瑞・津田愛之助・橘曙覧を吉植庄亮。徳川光圀・荷田春満・林子平・本居宣長・橘千蔭・上田秋成・蒲生君平・賀茂季鷹・平田篤胤・加納諸平・僧月照・梅田雲浜・有村次左衛門・高橋多一郎・有馬新七・田中河内介・児島草臣・松本奎堂・吉村虎太郎・渋谷伊与作・佐久間象山・平野国臣・真木和泉・武田耕雲斎・高杉晋作を川田順。下河辺長流・田安宗武・橘枝直・小沢蘆庵・栗田土満・大倉鷲夫・足代弘訓・鹿持雅澄・吉田松陰・徳川斉昭・平賀元義・野村望東尼・大隈言道を松村英一の五氏が分担執筆。（中略）百人の順序、本文氏の唱呼、語の正濁等は佐佐木信綱氏の考証に拠れり。即ち順序は便宜に排列し、他は歿年の次第とす。氏は津守国貴までは氏の下に、のをよみ添へ、他は然せず。唯江戸時代の荷田・賀茂・橘、荒木田はのをよみ添へたり。

とあり、撰定の次第、精神、等を知ることが出来る。戦時下精神作興の一翼を荷おうとした。これに対する註訳書も、前記解説をはじめ、評釈に川田順、窪田空穂、松村英一。絵と解梅田章、早わかり建国精神普及会編並に刊。習字用手本又は帖に神部晩秋・源元公子・平尾花笠、大沢竹胎等あり。その他、歌留多及その取り方も出た。小倉百人一首に代って、戦中の国民健全娯楽に資せしめようとしたのであった。

皇国百人一首

金子 薫園撰  
昭和七八刊

- 1 夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝  
ねにけらしも 舒明 天皇
- 2 わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜あき  
らけくこそ 天智 天皇
- 3 春過ぎて夏来るらし白たへの衣ほしたり天の  
香具山 持統 天皇
- 4 益荒男の行くとふ道ぞおほろかに思ひて行く  
な益荒男の伴 聖武 天皇
- 5 われこそは新島守よ隠岐の海の荒き浪風ここ  
ろして吹け 後鳥 羽院
- 6 四方の海浪をさまりてのどかなる我が日の本  
に春は来にけり 龜山 上皇
- 7 花に寝てよしや吉野のよし水の枕の下に石は  
しる音 後醍醐天皇
- 8 鶏の音におどろかさされて暁の寢覚しづかに世  
をおもふかな 後村上天皇
- 9 矛とりてまもれ宮人九重の御階のさくら風そ  
よぐなり 孝明 天皇
- 10 浅みどりすみわたる大空のひろきをおのが心  
ともがな 明治 天皇
- 11 新しき年の始めに思ふどちい群れてをればう  
れしくもあるか 道 祖 王
- 12 あしへ行く鴨の羽がひに霜ふりて寒き夕べは  
大和しおもほゆ 志貴 皇子
- 13 白雲のたえずたなびく峰にだに住めば住みぬ  
る世にこそありけれ 惟喬 親王
- 14 山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる  
雪の玉水 式子内親王
- 15 君のため世のため何か惜しからむすててかひ  
ある命なりせば 宗良 親王
- 16 ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり  
みすれば月かたぶぎぬ 柿本人麻呂
- 17 白金も黄金も玉も何せむにまされる宝子に及  
かめやも 山上 憶良
- 18 わかの浦に潮満ちくれば瀉をなみ蘆辺をさし  
て田鶴鳴きわたる 山部 赤人
- 19 青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今さ  
かりなり 小野 老
- 20 千万の軍なりとも言挙げせずとりて来ねべき  
男児とぞ思ふ 高橋虫麻呂
- 21 御民われ生けるしあり天地のさかゆる時  
に逢らく念へば 海犬養岡麻呂
- 22 ふる雪の白髪までに大君に仕へまつればたふ  
とくもあるか 橘 諸兄
- 23 ますらをは名をし立つべし後の世に聞きつぐ  
人も語りつぐがね 大伴 家持
- 24 大君のみこと畏み磯に触り海原わたる父母を  
おきて 文部造人麻呂
- 25 今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と  
出で立つわれは 今奉部与曾布
- 26 山鳥のほろほろと鳴く声きけば父かとぞ思ふ  
母かとぞ思ふ 僧 行 基
- 27 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出  
でし月かも 安倍仲麻呂
- 28 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのど  
けからまし 在原 業平
- 29 見渡せば柳桜をこきまぜてみやこそ春の錦な  
りける 僧 素 性
- 30 東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしと  
て春な忘れそ 菅原 道真
- 31 久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花  
のちるらむ 紀 友則
- 32 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音に  
ぞ驚ろかれぬる 藤原 敏行
- 33 さくら花さきにけらしも足引の山の峽より見  
ゆる白雲 紀 貫之
- 34 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこ  
に月やどるらむ 清原深養父
- 35 春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて  
けさは見ゆらむ 壬生 忠岑
- 36 吹く風を勿来の関とおもへども道もせにちる  
山さくらかな 源 義 家
- 37 ほのぼのと有明の月の月影に紅葉ふさおろす  
山おろしの風 源 信 明
- 38 山里の春の夕ぐれ来てみれば入相の鐘に花ぞ  
ちりける 僧 能 因
- 39 さびしさに宿を立ち出でて眺むれば何処も同  
じ秋の夕ぐれ 僧 良 暹
- 40 夕されば門田の稲葉おとづれて蘆のまろ屋に  
秋風ぞ吹く 源 経 信
- 41 風ふけば蓮の浮葉に玉こえて涼しくなりぬひ  
ぐらしの声 源 俊 頼
- 42 草ふかみ浅茅ましりの沼水に螢とびかふ夏の  
夕ぐれ 源 師 頼

- 43 夏の夜の月待つほどの手すさびに岩もる清水  
藤原 基俊  
いくむすびしつ
- 44 秋風にただよふ雲の絶間よりもれいづる月の  
影のさやけさ  
藤原 頼輔  
はれにけり  
源 頼政
- 45 み山木その梢とも見えざりし桜は花にあら  
はれにけり  
源 頼政
- 46 何事のおはしますとは知らねどもかたじけな  
さの涙こぼるる  
僧 西行
- 47 ほととぎす鳴きつる方を眺むればただ有明の  
月ぞ残れる  
藤原 実定
- 48 伏見山松のかげより見渡せばあくる田面に秋  
風ぞ吹く  
藤原 俊成
- 49 むら雨の露もまだひぬ榎の葉に霧立ちのぼる  
秋の夕ぐれ  
僧 寂蓮
- 50 人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後は  
ただ秋の風  
藤原 良経
- 51 棟さくそとも木かげ露落ちて五月雨霽るる  
風わたるなり  
藤原 忠良
- 52 山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わ  
があらめやも  
源 実朝
- 53 かすみ立つ末の松山ほのぼのと波にはなるる  
横雲の空  
藤原 家隆
- 54 夕月夜潮みちらし難波江のあしの若葉を越ゆ  
る白波  
藤原 秀能
- 55 駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたり  
の雪の夕ぐれ  
藤原 定家
- 56 末の世の末の末まで我が国はよろづの国にす  
ぐれたる国  
僧 宏覚
- 57 思ふことなくぞ見ましほのぼのと有明の月  
し有明の月  
木下 幸文
- 58 もののふの上矢のかぶら一筋に思ふ心は神ぞ  
知るらむ  
菊地 武時
- 59 かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名  
をぞとどむる  
楠木 正行
- 60 露おかぬかたもありけり夕立の空よりひろき  
武蔵野の原  
太田 道灌
- 61 もののふの鎧の袖をかたしきし枕にちかき初  
雁のこゑ  
上杉 謙信
- 62 心ある人に一夜の宿かりてなるもつらし明  
日のふるさと  
僧 契沖
- 63 信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷲のつばさもたわ  
わに吹く風かな  
賀茂 真洸
- 64 真帆ひきてよせくる船に月照れり楽しくぞあ  
らむその舟人は  
田安 宗武
- 65 敷島のやまところを人とはば朝日に匂ふ山  
ざくら花  
本居 宣長
- 66 隈田川蓑着てくだす筏士にかすむ朝の雨をこ  
そ知れ  
橘 千蔭
- 67 皇神の天降りましける日向なる高千穂の嶽や  
先づ霞むらむ  
楫取 魚彦
- 68 香具山の尾上に立ちて見渡せば大和国原早苗  
とるなり  
上田 秋成
- 69 おもふこといはでやまめや心なき草木も風に  
声立てつなり  
小沢 蘆庵
- 70 照る月のかげのちりくるこちして夜ゆく袖  
にたまる雪かな  
香川 景樹
- 71 いづくぞや鳴く山鳩の声はして夜はまだふか  
し有明の月  
木下 幸文
- 72 吉野山かすみの奥は知らねども見ゆるかぎり  
は桜なりけり  
八田 知紀
- 73 姫島の松の夕日に雁なきてわが子恋しき秋か  
ぜぞふく  
加納 諸平
- 74 夕鞠の音は音せずなりしより柳にかかる春の  
夜の月  
千種 有功
- 75 みそぎせしあと川柳ひと葉ちり二葉こぼれて  
秋風ぞ吹く  
清水 浜臣
- 76 親を思ふ心にまさる親ごころけふのおとづれ  
何ときくらむ  
吉田 松陰
- 77 かきくらす亜米利加びとに天つ日のかがかやく  
邦の手ぶり見せばや  
藤田 東湖
- 78 梓弓まゆみつき弓さはにあれどこの筒弓にし  
く弓あらめや  
佐久間象山
- 79 大君のためには何か惜しらかむ薩摩の瀬戸に  
身は沈むとも  
僧 月照
- 80 天つ風ふくや錦の旗の手になびかぬ草はあら  
じとぞ思ふ  
平野 国臣
- 81 われをわれとしろしめすかやすめろぎの玉の  
み声のかかる嬉しさ  
高山 正之
- 82 朝日かげ豊さのぼる日のもとのやまとの国の  
春の曙  
佐久良東雄
- 83 むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり  
遊ぶを見れば  
僧 良寛
- 84 ひとたびは野分の風の払はずは清くはならじ  
秋の天空  
野老望東尼
- 85 太刀佩きて吾がさもへば夏の風暑く吹くなり  
美作の宮  
平賀 元義
- 86 蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに走る西

へひがしへ

井手 曙覧

87 窓に窓むかひあひたる大船の一夜どりのむ

つましげなる

大隈 言道

88 吾が顔を壁の穴よりうかがひつ鼠の友と思ふ

なるべし

安藤 野雁

89 おり立ちて朝葉洗へば加茂川の岸の柳にうぐ

ひすの鳴く

大田垣蓮月尼

90 白檜の若葉音なき朝かぜに松の花ちるみたら

しの水

高崎 正風

91 大君の大御硯になる見れば玉にもまさる石は

ありけり

税所 敦子

92 潮けぶる灘のあら浪さぐくみてくぢら行く見

ゆ真熊野の海

海上 胤平

93 あたまもるとりでの篝影ふけて夏も身にしむ

越の山風

山県 有朋

94 うつし世を神去りましし大君のみあと慕ひて

我はゆくなり

乃木 希典

95 大空は明け初めぬらし百鳥の啼を出づる声の

さやけさ

僧 愚庵

96 一つもて君を祝はむ一つもて親を祝はむ二も

ある松

落合 直文

97 遠じろき川瀬わたりてたかどのにとりの国

の風ぞ入りくる

井上 通泰

98 瓶にさす藤の花ぶさみじかければ疊の上にと

どかざりけり

正岡 子規

99 元の使者すでに斬られて鎌倉の山の草木も鳴

りふるひけむ

伊藤左千夫

100 そのむかし少年にして師の大人のうしろより

見し秋萩の花

与謝野 寛

○

〔解説〕昭和十七年八月十五日、「皇国百人一首」として、文明社から刊行した。B 6 版、二六頁、見開き二頁右に歌を左に註釈をかけた。序文に

本書は皇紀二千六百年來の日本精神に徹せる名歌百首を撰んで、一人一首の体制に従ひ、ほぼ時代順にこれを排列し、その一首一首につき平易簡明な解釈を施した。

百人一首といへば藤原定家撰ぶ「小倉百人一首」がすぐ何人の頭にも浮んで来る。それほどこれは余りに名高く、伝統的の普及力驚くばかり強いのである。その入撰の名歌の価値については暫く措き、その内容両性間の情事を歌へるが多く、これを吟唱するに憚るものがある。特に健全たるべき家庭で新年用娯楽の機関として今日なほこれを襲用して怪しまざるは、訝しき限りである。従来一部識者の間にこれに対する非難の声は聞えて居りながらも、飄然として起って改むる挙に出づる人はなかった。

文明社長楠間氏、深くこれを慨し、私に日本精神に徹せる名歌の撰を謀られ、検討を重ねた上、曩に先づ「新知識」誌上に発表したのが、この度更にその一首一首につきこれを解明した本書を公にするに至ったのである。

私はこれ撰ぶにあたり、単に名歌といふのみでなく、皇国といふ文通字りの意識を強調して、これに該当しないものは採らな

った。名歌なりや否やの検討は第二として、皇国精神に準拠せるものはその硬軟を問はずに採った。そして又一般大衆の耳に遠く、意難解にして声調を害せるものの如きは、その名歌として伝はるものといへどもこれを採らなかつた。

なほこの「皇国百人一首」が、新年の全国家庭に「小倉百人一首」に代つてかるた用として健全娯楽機関に用ゐらるる日の疾く実現せんことを念じて止まない。

昭和十七年三月

著者

とあり、員外に神武天皇御製「撃ちてしやまむ」の三首をおき、本文は、舒明天皇をはじめ明治天皇まで天皇皇族十五人、以下は柿本人麿から与謝野寛に至る歴代の名歌を集めた。

時代順に排列するといひながら、天皇、皇族を特別あつかひにしたところなどは当時の国民精神の動向がうかがえる。小倉百人一首を否定的に云っているけれども

春過ぎて夏來たるらし白たへの衣ほしたり天の香具山 持統 天皇

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にい 安倍仲麻呂

などをはじめ「久方の光のどけき」(友則)「夏の夜はまだ宵ながら」(深養父)「さびしさに宿を立ちいでて」(良暹)「夕されば門田の稲葉」

(経信)「秋風にただよふ雲」(頭輔)「時鳥鳴きつる方を」(実定)「村雨のつゆもまだひぬ」(寂蓮)など小倉百人一首所出のものもある。